昨年の史學地理學界

史學界

史學一般　この項に屬する著譯書としては先づ「歴史の理論及方法」（植村清之助、安藤俊雄共譯）を擧ぐべきであらう。之はエドアード・マイヤーの「小論文集」第一章を飜譯したもので從來哲學者側から色々論ぜられて居る問題に關し專門歴史家側の見解として特に傾聽すべきものが少くない。原著者は自然科學的史觀論者に一矢を報い、歴史は體系的科學ではなく、自然科學と史學とは本質的に異なる所以と說き自然科學に於ける如き恒久不變の法則が史學の分野にも存在してこの法則が個々の史的事件を支配するものではないと力說して居る。其の附錄たる「歴史研究法に對する古代東方開拓の意義」は原著者の歴史研究法を叙述したものである。雜誌の論文中「ヘーゲルの歴史哲學」（關榮吉、思想）は自由精神の體現たる國家の興亡は世界の理念によつて變遷し、交代するこいふヘーゲルの史觀を忠實に紹介したものであり、之に關聯して「ヘーゲルの國家理念論の考察」（今中次麿、國家學會雜誌）がある。「歴史の本質」（大西友太、哲學雜誌）では歴史の理想は絶對であり、現實の個性に特殊の重味を加へる、其の理想は意志の絶對自由、斷言命令に於ては肯定さるべきであり、隨て理想的歴史は吾人の實際生活に於て道德の形式を以て發展すべきものなると論じ「歴史と教育」（同人、哲學研究）は一回性なる歴史は再現することなく其の教育に對する影響の重大なるは要するに歴史固有の概念構成から見て過去の歴史は現在に活き、現在の力によつて現在に生命を持つからであるとして居る。「歴史研究に就ての一反省」（寺本慧達、國學院雜誌）は先、實際歴史家が現在如何なる研究方法を採用して居るかと問ひ、史料の解意と配列とを以て研究の總體と考へ、主觀的自由判斷を加へざる形式的研究に史料を通じ、過去の社會を自ら創造しつゝ認識し主觀的判斷を許容し又は

必要とする藝術的研究とに分ち前者を排けて後者を推奨して居る「階級の動學的考察」(高田保馬、經濟論叢)はマルクス派の唯物史觀によれば生産其のものが色々の社會關係を動搖せしめる從て階級組織の變動も生産力の變動に基くといふ、しかし生産關係從つて其のうちに含まれる階級關係を動かすものは生産力其のものではなくして生産力の基礎となるものである、之卽ち野生的勢力であるとし其の成立、發展を詳論しこの勢力の形成が階級組織變動の理論的考察に於ては中心的意義をなすものであるこ論じて居る。「政治現象の本質」(恒藤恭、同誌)は政治現象を一切の文化現象或は社會現象から區別され獨自の性質を具へるものとして考察し其の論理的意義を把捉せんとする研究である「宗教的對象としての歴史的人格」(菅圓吉、哲學研究)はキリスト教の立場から論じキリストが永遠、絶對、超歴史の世界から有限、相對、歴史の世界に引き下げられても信仰の上に何等の支障を生ずるものでないことを力說して居る「「時」運命」(原隨園、史學雜誌)では歴史構成の一要素であり、また一動因たる「時」の威力は屢々運命と呼ばれるが普通運命と稱せられるものは種々の意義を有し、因果應報の概念も宿命的思想もまた比較的長き時間を經て現はれる人間生活の必至の運動も之に對照される豫測しがたき偶然的事件も之を運命とする、故に時の威力を考察するには斯る運命觀を對象とすべきであるとし古代希臘人殊に歴史家はこの問題を如何に取り扱つたかと比較考量した論文である。尙史學史に關するものには「獨逸史學の二大百年記念祭」(坂口昂、史林)がある、之は Monumenta Germaniae Historica の編纂事業の創始とランケの處女作 Geschichte der Romanischen und Germanischen Völkeer の出版を丁度百年後に回想して獨逸の史學、否世界の史學界に如何なる意義を有するかを論じたもので前者に就いてはスタインが獨逸の國情に鑑み、この事業を計劃するに到つた公私の事情、並に其の計畫が列國の王室、教會自由思想家等から各々疑を被り事業の遂行に幾多の障礙をうけしこと、を述べ後者についてはランケが同書によつて史學史上に一時期を劃し世界史的史風を創立したる所以を論じ最後にランケを單

に政治史家なりとする誣妄を論駁し、大戰後獨逸の史界に於てランケに歸れの聲高きは卽、カント、ゲーテと共にランケが獨逸學界の巨星にして永久に其の指導者たることを意味するものであると附言して居る。〔菅原〕

國史　國史に關する論著の中先づ例によりて一般史政治史に關するものから擧ぐれば「神代史の研究」(津田左右吉)はさきに著せし「神代史の新しい研究」に引續いて「記紀の新研究」と姉妹篇をなすべきものである。先づ天地剖判の傳說が易の思想と老子の道との混和に宇宙生成論を結合せしめたものであると言つた風に一々說明を加へ、最後に記紀の神代史はヤマト朝廷の作成せしもので其潤色は諸民族中皇室と關係ある民族によりて施されたやうであり、その作成年代は六世紀に入りて外交問題の紛叫した際、皇室起原强張の爲に發生したものであるとするとしたのは、「帝紀舊辭の將來」(志村健雄、歷史と地理)が記紀共に應神朝を界として其の前後の記事の相違に着目して、此時代に第一回の編輯があり、第二回は記は顯宗頃、紀は武烈頃に物語はたと絕えて、繼體頃より精細なる記錄を始めたものらしいと言つて居り、また「日本文化史研究」(內藤虎次郎)が日本民族の國家成立の時代は殆んど高麗と同時代で三韓よりは早く、三韓の文化が我國に傳つた頃は我が國の文化の方が進步して居つたのであると言つたのと併せ考ふべきであらう。また「我が太古の婚姻法」(中田薰、法學論叢)と題して記紀に見ゆる目合は男女相許すの私約を意味するのであつて、この私約が成立して後、女子の父兄の同意を求めたのが普通の順序であり、その目合の機會は歌垣の際などが多かつたのであつて、掠奪婚や Child betrothal は寧ろ例外であらう、と言つたのと「我が國上代の親子關係」(高橋俊乘、歷史と地理)を見て子と母との間は子と父との間よりも親密の度が深く、家庭生活に於て父は子女敎育の責任を持つて居ないのであつて、それが後世の如き親子關係に變じたのは奈良朝時代であつた、とせると共に上代史の一側面觀である。次て「王朝時代の地方行政に關する一考察」(宮地直一、史學雜誌)は九條家古寫延喜式を主として論じ、諸國の政治は甚しく荒廢の極に達したのではな

く少くとも其の筆頭に置かるゝ神社行政はもとより國分寺及び定額寺に關する事務も或る程度までの實績の擧つた實證が提起せられると言へる事や、鎌倉時代に於て「兩統問題の一波瀾」(三浦周行、同誌)は龜山法皇が恒明親王を鍾愛せられて將來儲君たらしむべき事に就て後宇多上皇伏見上皇の諒解を得らるゝと共に西園寺公衡にも援助を求め給うたことより、法皇の崩御後兩統間の波瀾を說き、上皇は遂に法皇の素意に反して尊治親王を立坊せられたけれども、實際に於て法皇の素意に違背し奉つたのは幕府であつたと斷じたものがあり、更に時代が降つては「戰國時代概觀」(同人、中央史壇)として此時代に御家人制度が崩壞しそれと共に最も露骨な下剋上の時代となつて庶民の勃興、氏族の分裂を來した結果群雄割據となつたのであると言ひ、それと相應じて「織田時代史」(田中義成)に於て信長の、濃州織田氏三奉行の一家の系統であること、早くも鐵砲隊と槍隊との新兵制によりて長篠役に勝利を得たのは戰術史上の一新紀元であること、新領土を有功の士に與へた國制の制が新封建制を馴致するに至つた事抔を巧みに說破してある。而して其の記述を補ひ且つ參考とさるべきものとしては「今川氏につきて」(赤堀又次郎、中央史壇)論じ足利尊氏の時に範國が遠江の守護職を命ぜられたときにはなほ勢力微々であつたけれども、京都鎌倉の連絡點として戰略上重要な意味があつたとしたものや「毛利氏の勃興」(水本京太郎、同誌)や「九州三大族の政爭」(島津大集、同誌)、「伊達正宗の會津征伐」(花見朔巳、同誌)があるし、その時代の表面上の中心人物『薄倖の將軍足利義昭』(同人、同誌)の一生を通觀したものがある。近世に至つては先づ「牢人の意義」(栗田元次、歷史と地理)に就て說をなし、王朝期の浪人は勿論浮浪人の意味であるけれども、江戸時代の浪人は、牢籠人の謂であつて必ずしも武士を指したものとは限らないとし、その浪人政策のために發生した「由井正雪事件の一考察」(今村孝三、同誌)を加へ、幕府の浪人取締政策ますゝ嚴重ならんとする際、其の議に反對したのは阿部忠秋であつたが幕府は終に末期養子の禁を弛うし、それが成功して幕末まで浪人の禍害は跡を絕

つたと言つて居る。幕末維新に關する研究としては「孝明天皇の聖謨」（松野邊崇、史林）は主として近衛家文書によりて安政五年以來の時局に對する宸衷を說き、轉じて天皇は攘夷は始終希望し給うたけれども、武備の充實を先きとし給ひ、また急激な政變による王政復古よりも寧ろ關東委任を欣び給うたやうであつたと述べ「維新の改革と中世否定の運動」（竹岡勝也、思想）は單に政權を朝廷に收めんとする丈の理想から維新が起つたのではなく中世を否定しやうとする運動のためであつて、それは古道を復興せんとしたのであり、皇室の統治下に、神々の道を實現する事を理想としたのであるとして居る。更に對外關係を見たものは「淳仁朝に於ける新羅征討計畫について」（和田軍一、史學雜誌）論じ、其新羅に對する復讐と服屬の理想とを達成せんとする時代思想があつたゝめで、之を指導した中心人物は惠美押勝であつたが彼の沒落によりて終結を告げたとせるが、最も古いもので、他は多く江戸時代のそれである。卽ち「佐久間象山の對外意見」（井野邊茂雄、國學院雜誌）を見ると互市を許す事は銅の輸出をますゝ增大せしむるおそれあるため反對して居たけれども、出來るだけ戰爭は避けた方がよいとし、嘉永六年ペリー渡來の時には非戰開國說ではあつたけれども、直ちに彼の要求に應ずるは非なりとして安政開國には大に非難を加へて居ると言ひ「十七八世紀に亘れる露國の太平洋發展と對日關係」（田保橋潔、歷史地理）を論じたもので、露國の極東經營中カムチヤトカ半島のそれには非常の苦心を要した事、享保四年ペートル大帝のフエオドル・ルージン等に命じて千島を探險せしめた事、元文四年マルテイン・スバンゲンベルグの事件及び明和八年のフォン・ベニヨウスキーの南航を說明し、「江戸時代漂民歸國後の待遇」（井野邊茂雄、國學院雜誌）は文化元年九月レザノフが仙臺の漂民四人を護送して長崎に來た時、其中の一人太十郎が梅ヶ崎の小屋で自殺を企てたのは必ずしも精神錯亂のためでないらしく幕府の斯る注意人物に對する反抗が手傳つたかも知れないと言つたのは何れも對露關係を取扱つたもので、昨年來世人の注目を惹いた日露交涉が斯界人の一刺戟となつた結果と

見る事が出來やう。人物を中心としたものは一昨年と同じく極めて少く「蕃山先生の終焉」(藤懋靜也、中央史壇)に於てマラリア熱であつたらしいと斷じたものと、「頼山陽の半面」(北村壽四郎、史林)に於て彦根藩の儒者と山陽との交誼を叙したものと共に有名なる儒者の一面觀である。而して昨年は恰も新井白石生誕二百年シーボルト渡來百年に相當するために、東京及び京都其他各地に於て白石並びにシーボルトに關する講演會や陳列が行はれたが、論著の方面にもその影響があつた、即ち白石に關しては「新井白石と復號問題」(三浦周行、史林)に就て白石の大君號非難の論旨堂々たるものあるに反して、日本國王の主張は頗る窮して居ることを指摘し、「新井白石とヨワン・シローテ」(吉野作造)に於て白石がヨワン・シローテの人物鑑識に當つて何等の偏見に迷はさるゝ事なくシローテの處分に關しても、道に據つて法を枉ぐべしと論じた見識はまた封建時代として見上げたものだと言つた、更に我國に歐洲の學問技術を輸入し、日本の文獻を學術的に研究して之を歐洲に紹介し、且つ日本開國の運動者であつた「シーボルト先生渡來百年記念論文集」が出來たが、その中で「醫學者としてのシーボルト先生」(吳秀三)は當時恰も醫學界は新治療法の續々發見せられた時代であつたから、和蘭政府は、智識欲に渴せる日本に彼を派遣して日本の要求に應ぜんとした事より彼の功績を紹介し、「歐洲に於けるシーボルト先生」(コイベル)は歸國後の和蘭政府の優遇の事、日本採集品の保管等の事に併せて歐洲に於て日本開國運動に從事した事を記して居る、そのシーボルトが文政十一年任期滿ちて本國に歸らんとせる時我邦に於て蒐集した研究材料を携へ去らんとするに及び、端なくも國禁に觸るゝ所となりて彼自身は、勿論日本人にして之に關係ありし人々の取調となりし「所謂シーボルト事件」(吳秀三、史學雜誌)を說明し、更に「シーボルトは如何にして日本を研究せしや」(同人、史學)に於て、彼の日本研究が日本の役人、學者、其他上下の人々の好意による助力に俟つ所多いと言つて居る。轉じて社會史方面を見ると、「日本社會史とは何ぞや」(喜田貞吉、歷史と地理)は前年發表された、社會上

の諸現象を專ら經濟的方面のみから觀察しやうとする本庄博士の說に反對して民族や土俗の方面も社會史の一部であるとの持說を主張し、「日本社會史」(本庄榮治郎)に於ては日本社會史は日本の社會に生ぜし階級の原因如何階級間の爭鬪と階級內の紛爭と何れが甚しきやの疑問を解くものが日本社會史であると自說を支持した、次に「我が太古の農業」(喜田貞吉、歷史地理)は由來土着民族の間に行はれたもので、由幸彥なる天孫民族は彼等から農業を學んだものであると言つたのは、「王朝時代の農民生活」(西岡虎之助、同誌)が彼等の窮迫狀態を叙し、「安土桃山時代の農民」(花見朔巳、同誌)が農民自ら武器を蓄へて衞り場合に依りては一戰をも辭せなかつたと言へると共に農民を對象としたもの「戰國時代に於ける民衆生活の一面」(高須芳次郎、中央史壇)が堺、大阪、小田原等の都市發達の民衆の力による事多きを說き、「元祿時代の大阪及び大阪人」(木谷義七郎、國語と國文學)が彼等の經濟生活は貨幣經濟の時代より既に進んで信用經濟の時代に達し、その得たる金錢を遊廓、芝居等に於て消費

したのは彼等の家庭生活にも起因すると說いたのと共に町人階級を對象としたものである。また「天平時代に於ける奴隸の價格に就いて」(瀧川政次郎、思想)は、一人の平均價格は稻六百八十一束餘で、奴婢各一人の價格は下下戶の全財產に當るから當時に於ては奴隸の增加は豐穰よりも目出度い現象であつた事を指摘し、「中古賤民の等級に就いて」(同人、史學雜誌)は賤民間に存在せる輕重の等級は、賤民が良民と爲り得る可能性の確否如何、賤民が財物として取扱はれる程度如何といふ事と併せ考察さるべきであると言ひ、而してその賤民と良民との中間の人なる義を有する「間人考」(喜田貞吉、歷史地理)に於ても良賤の區別標準が一定しない事を認め、古代に於ける品部雜戶や賤民中の上位なる家人もまた間人であり後にハチ又はハチヤの稱を有するもの亦間人であるとしたのは何れも賤民を對象としたものである、また我國の民族成立に關するものには「倭人考」(坪井九馬三、史學雜誌)は我國民は前印度モンクメール系の倭人と、前印度チアム系の筑紫派と、ツングース・カラ系の出雲族と、

ツングース・ウスリ系の吾田系とより成り、ツングース系の二派が我が國家を建設し國民を大成したものであると言つたものや、「伊勢人考」(喜田貞吉、歴史地理)は伊勢人はもと海人の族で、古來海岸にあつて漁業に從事した者であるが、夙に天孫民族とは同化融合し、其後と雖も沿海地方のものは祖先以來の漁業に從うたものであるとせるものである。更に法制史としては法律進化論(穂積陳重)の中の日本の法制に關する各種の記述を始め、「貞永式目の研究」(三浦周行、復興叢書)は、式目の世に行はれたのを讀み本若くは手本としての外に當時の現行法、戰國時代法制編纂の母法の三因によつたと言ひ、式目制定以來解釋上漸く秘說を生じ、公家側の註釋家の手に移りては種々の誤解をも生じたが、特に鎌倉時代に式目解釋家として齋藤氏側の代表として唯淨裏書のある事を指摘し、「大阪法制史」(同人、大阪文化史論)は皇都時代石山本願寺の門前町時代豐臣氏の城下町時代德川氏直轄の時代の四期に分つて各時代の法制の跡を繹ね、「長宗我部元親」(福島成行、中央史壇)は其の法制中に菊桐の紋章使用を禁じ皇室の尊嚴を明示した事を注意し、「審略的婚姻と女性の活動」(西岡虎之助、同誌)の中に元親百ケ條、吉川家法度、塵芥集抔に他人の妻を犯す事を嚴禁し、夫不在中には男子の立入る事を禁じたのは此時代の必然的の反映であるけれども、また一面には儒教主義の道德觀念によるものであるとしたのは武家法制に關する研究であるが、最も新しい「陪審制度の起源沿革に就て」(南舟生、國學院雜誌)は、我が國にも聖德太子憲法や御定書百箇條の中に其の精神は存じたけれども、法文になつたのは明治十一年十二月に編纂せられたボアソナード博士の治罪法であるが、陪審の親定は反對者のために削除され大正十二年に至つて可決された事を說いて居る。經濟史の範圍に於ては、土地問題を中心としたものに「鎌倉時代の土地制度」(三浦周行、經濟論叢)は前年に續いて神領、寺領、國領、本所領、武家領の法制史的經濟史的考察を試みて居る。「尊尊僧正と時勢」(牧野信之助、史林)が長祿四年に端を發した田樂頭數三萬疋の所課に就いて起つた爭議について、僧正の執つた對庄民策を說い

たのは「足利莊及足利學校に就て」（渡邊世祐、史學雜誌）に足制莊が室町時代に至りて幕府の直轄地となつてから幕府の管領が其の家老より代官を任じて下したと言つて居るのと共に庄園管理上の一例と見做すべきであらう。「大阪經濟史」（本庄榮治郎、大阪文化史論）に於て元和五年堺の一商人に依りて大阪より海上木綿・油・綿・酒・酢等を江戸に運んだのが菱垣廻船の濫觴であつて、この廻船の發達による江戸大阪間の經濟的關係の密接は、大阪が全國商業の中心たる地位を益確保せしめた事、德川時代後半に至つては町人階級は金權のみならず、精神的文明をも支配せんとするに至つた事を說いて居るものがあり、また「質屋について」（幸田成友、商業研究）、鎌倉室町時代に現はるゝ無盡錢土倉の仕組は、入唐入宋の僧侶が見聞した支那の無盡藏・長生庫の影響を受けた事はあらうけれども、これを我邦の質屋の起源とする事は出來ないが、建長七年八月の御敎書に、無盡錢と稱して質物を入れなければ借用を許さぬ營業者が出來た事を記して居るのは、我國に於ける質屋の起源であると言つて江戸に於ける質屋の營業振りや、これに對する取締方法を詳說したものがある、此時代に町人と共に最も重要な經濟要素であつた農民を如何に取扱つたを見るには「江戸時代における農民愛護の思想」（中村孝也、歷史地理）がある、この思想は農民抑壓の思想と併存したものであるが、その中には道德的自治組織を理想とする思想もありて、それには無理解なる農民壓迫の片影すらも認むる事が出來ないものもあると言つて居るものがある、また「水戸藩常平倉の成立」（本庄榮治郎、經濟論叢）は天保二年以來水戸藩に行はれた常平倉が穀價平準の本來の目的より財政上に流用さるゝに至つた經路と其の性質とを明かにし、「水戸藩常平倉の運用」（同人、同誌）は其の舊穀借出しをも行つたところに相當の效果があつたらうと言つて居るのは「天災を豫防した鈴木爲蝶軒」（大塚久、中央史壇）が黑羽藩に於て早く寶曆九年に鄕倉を創設した事を紹介したのと共に天災異常時に於ける爲政者の苦心を物語るものである。更に「荻生徂徠の貨幣論」（中村孝也、同誌）は銅錢增鑄論であつた徂徠の學說を批判して居る。

また「奈良朝時代の斗量」(澤田吾一、史學雜誌)は上田一町の稷稻五百束卽ち穀五十斛が今の約四斗に相當する事を計算上より示し、口粮一升は卽ち四合、口分田より得る男子一日分の收入は今の約三合一勺、女子は今の約二合一勺に當る爲め自然食料に幾分の不足を來す事が、庶民の口分田以外に地子田を作り、墾田を開き、他人の勞役に從ふを餘儀なくした理由であるとした。「京都五人組編制の年代」(中田薰、國家學會雜誌)は京都の十人組が正保二年から明曆元年に至る間に五人組に變更されたのであるといふ先きの假定說を新に發見せられたる史料により寶永六年末より同廿一年初に至る約十五年間の出來事であると、改め、また「京都に於ける神社と氏子の關係及敷地役に就いて」(岩橋小彌太、歷史と地理)は稻荷神社の敷地役徵收區域が氏子區域と一致する事より、氏子區域とは神社が其の所有の土地を敷地として人民に貸與し敷地役を徵した區域の事であると言つたのに對して「氏子區域と敷地役」(中村直勝　同誌)この間に何等のコンスポンドはなく、敷地役を取つた區域は社領であつて氏子ではないと言つて居るのと共に京都に於ける法制經濟の一瞥見であらう。「舊宇和島藩の關持制度」(小野武夫、史學)は此制度が藩祖伊達秀宗の吉田の分封より本藩領地の減少となり、延いて財政困難を來したゝめ寬文十年能吏八十島治右衞門を檢地頭取として六尺五寸竿を六尺に直して檢地し增步を得んとした事に起原を有すと言つて其の內容を論究し「幕末諸藩の富强策について」(牧野信之助、歷史と地理)は大野藩が口蝦夷及び北蝦夷の經營に力を盡し、內外通商によりて巨利を得た樣子を詳述したのは何れも藩に於ける經濟組織を物語つたものとすべきである。「德川幕府非常用の金銀分銅の研究」(遠藤佐々喜、史學)は分銅の事を法馬といふ事より其の性質沿革を說いて居り、「造幣局設立の由來及び其敷地に就いて」(澤田章、史林)は德川幕府が慶應二年五月英米佛蘭と結んだ改稅約書の第六條に基き、明治政府が外國事務局掛の後藤象二郎、伊藤博文等の意見に從つて設立したものであつて、其の敷地は川崎にある舊幕府の米廩の跡全部と幾分材木藏の方にも及んで居つたと言つたのは貨

幣經濟時代に移つた時代の研究である。〔中村〕

文學の方面では「萬葉研究史上の新資料」(佐々木信綱、心の花)は最近渡邊伯所藏の寛永本萬葉集の跋文を見て從來世に知られなかつた水戸家に於ける萬葉集校訂事業を明にした事を記し「飛鳥井雅章筆本萬葉集に就いて」(同人、同誌)は此書は寛文年間の書寫で正確な典據とはし難いが書入及び奥書によつて萬葉學上從來未知の事が知られると述べ「皇室關係の萬葉歌人系譜について」(澤潟久孝、藝文)は萬葉歌人中皇室關係の人達の血統及ひ生存年代を考究し其中古記錄に異說のあるものや舊來の學說の誤謬なぎに就て述べ「相聞考」(山田孝雄、心の花)は萬葉集中の相聞といふ部類の意味は用にしては消息を通ずる事體にしては信書の事で用を表すが本義であると云ひ次に夫が後世歌集の戀部に相當するや否やに就て論じ「堀玉集と本邦文學」(同人、藝文)は萬葉集今昔物語の中には堀玉集中の說話を基礎としたらしい所が有り伊勢物語今昔物語が昔といふ語で筆を起してゐるのは堀玉集の體に倣つたものゝ如くであると述べ「源氏物語のモデル」(手塚昇、國語と國文學)は此の物語のモデルに就ての從來の諸說を列擧して其の研究失敗の原因を述べ次に同物語全般のモデルに就き論證を試み「源氏物語著作の時期」(同人、同誌)はあれだけの大傑作を成就するには少くとも十數年或は廿年位を要したであらうとし更に此の大作は一時に書かれたものではなく少くとも三期に分つて書かれたものであらうと述べ「源氏物語聞書と弄花抄」(山脇毅、藝文)は從來源氏物語聞書は三條西實隆の著と考へられてゐたが實は肖柏が書いたもので弄花抄は從來肖柏の著と考へられてゐたが夫は却て實隆の手に成つたものであると斷じ「源氏物語弄花抄と細流抄」(同人同誌)は此の二書の書寫等の事に就て述べ更に野史の實隆の條と公條の條との誤謬を指摘し「大鏡に關する考察」(藤村作、國語と國文學)は大鏡の著者は道長に就て何を語らんとし如何なる態度を以て彼一代の事歷に臨まんとしたのであるかを考察し「更科日記錯簡考に就いて」(佐々木信綱、心の花)は宮內省御藏本定家筆更科日記は流布本の原本であつて之に依て錯簡の全部を明瞭にする事

が出來たと述べ「平安朝歌壇の新人」(次田潤、日本教育)は勅選集時代の歌風は古今集と新古今集との間には可なりの相違があるが之は道長時代から院政にかけて時々歌壇に動搖を來した革新派の歌人が現はれたによると云つて夫等の歌人の歌風等を述べ「六時讃と梁塵祕抄長秋詠草徒然草」(志田義秀、心の花)は俊成の長秋詠草中に六時讃の句を題にした歌があるが此の六時讃は厭欣時衆淨業和讃中に收められて居つて其の一節と梁塵祕抄中の歌謠と一致するものがあり又榮花物語によつて此の讃が同物語以前に存して居つた事を知り得ると述べ「長秋詠草に見えたる極樂六時讃について」(橋川正、佛教研究)は此の六時讃の歌は俊成が美福門院の御命によつて奉つたもので讃の繪は女院御起居の白河押小路殿に在つたものであらうとし又「方丈記管見」(後藤丹治、藝文)に於て方丈記は鴨長明が著はしたものである事を斷定すべき積極的證據は無いが又之を否定する程の有力な理由も無いと述べ更に此書を後人の僞作なりとする藤岡博士及び野村八良氏の說を駁してあるに對し「方丈記再論」(野村八良、同誌)は長明著作否定說に對する自己の立場を明にし「茂範卿の唐鏡に就いて」(後藤丹治、同誌)は此書は嘉禎から弘安迄の間に茂範卿が著はしたものであらうと述べ「長門本平家と盛衰記との關係」(同人、同誌)は此書の間に親子關係あり且つ前者は後者より後に出來たものと看做すと云ひ「仙源抄の二證本」(山脇毅、藝文)は此書の古寫本の中專順本と耕雲山人自筆本とは書寫年代が御撰述年代に近く此書の證本として最も有力なものであらうとして此の二本を詳細に比較し「足利時代に於ける勅撰集編纂の特異の事情について」(岩橋小彌太、史林)は平安朝では勅撰集は四五十年に一度位の割合で編纂されたが足利時代には十數年に一度宛竹編纂された又此時代の集には序文に武家政治を謳歌した文句が有ると云て此等特異の事に對する事情を考察し「東洋小說の精華德川期文學と水滸傳」(千葉龜雄、觀想)は德川末期の小說界の粉本として最も大きな影響を持つたものは水滸傳であると述べてゐる。語學字音に關しては「國語々原考」(大槻文彥、史學雜誌)は古事記中の言語の語原に就いて綿密に考證

し「和邇考」(坂根道治郎、國學院雜誌)は紀記等に見えてゐる和邇とはワカ又はサメの類を指したもので、サメ類では比較的大なるものに限られて居つたやうであると言つてゐる。國學漢學に關しては「大阪の國學及儒學」(今井貫一、大阪文化史論)は大阪にては儒學の發達は京都江戸より大に後れたが國學に於ては率先の名譽を有してゐるとて德川時代を通じて儒學及國學が如何なる發達を成したかを概說し「賀茂眞淵の古道說に就いて」(大石新歷史と地理)は眞淵の復古思想は先づ文學上に於ける萬葉主義となづて現はれ次で古代主義卽ち古道說となつたのであるとて其說に就いて叙述し其他「隱れたる國學者長野美波留」(樋畑雪湖、國學說雜誌)「賴山陽の半面」(北村壽四郎、史林)等がある。教育道德思想方面では「令制の國學について」(高橋俊乘、哲學研究)は國學の目的學生教官等の事を述べて其の教育程度は大學典藥二寮に比して著しく低かつた事を云ひ國學の變遷を述べて其の廢亡は平安期の末か或は其れより以前であつたらうと言ひ、「綜藝種智院考」(淺井義明、密宗學報)は此院は綜合的教育の濫觴で教育の民衆化を發揚したものとし更に此院が大師入寂後幾何もなく廢滅したのは其の遺業を繼承するに足る偉大な能力者が無かつた爲であらうと述べ「足利莊及足利學校に就て」(渡邊世祐、史學雜誌)は此莊は幕府の管理で上杉憲實が之を預つた時に彼は莊內に在つた足利學校に種々の書籍を寄附し其後長尾景人が此莊の代官と成つた時學校を現在の地域に移したが其舊地は恐らく勸農の地であらうと述べ「六諭衍義に就いて」(東恩納寬惇、同誌)は此書は享保から明治迄屢印行された者で夥しく流布したに相違ないとて其の流布狀態を見る爲各種の異本に就て說明し「武士道の起源及び特質」(高橋俊乘、哲學研究)は武士道が具體的の物になる迄は天慶の亂後約百年を經たと思はれるが武士道といふ語が出來たのは戰國時代の末頃らしい而して之は武士が主人に對する道として習慣的に發達した者であると云ひ「鎌倉時代の武士道管見」(淸原貞雄、歷史と地理)は武士道は鎌倉時代に爲政者が武士の道義を導く事に努力した結果著しく勃興したが他面には禪宗の興隆が其大成を助けた事も

認めねばならぬとして更に武士道の內容を批判し「平安時代に於ける道家思想の隆興」(本多辰次郎、中央史壇)は道教傳來の事より平安朝に於ける陰陽道等の事を述べ最後に道家思想の影響する所頗る大であつた事を說き「北畠親房の思想」(淸原貞雄、史林)は國體論、開闢說並神道說、政治論に分つて彼の思想を觀察したものである。風俗の方面に於ては『風俗の流行と變移』(江馬務、風俗研究)は其の流行と變化の生ずる動機性質等に就て論じ「日本服飾史」(櫻井秀)は我國服飾變遷の跡を尋ねて過去の人及び其生活狀態を觀察し、其他「水干考」(江馬務、風俗研究)「衣紋道傳統考」(櫻井秀、藝文)「本邦蹴鞠史考」(同人、史學雜誌)等があり、婚禮に關するものには「婚姻に關する習俗法令」(關根正直、中央史壇)「室町時代に於ける武家婚禮式」(江馬務、風俗研究)等がある「又紀伊に特有の何楠といふ人名」(喜田貞吉、歷史地理)にアイヌが名の下にアイヌと附けると同樣に紀伊の國栖人が何クスと附けたのが本で夫を後に楠神の申し子と附會して名の上にもクスを附けるに至つたものであらうと云つてあるに對して「紀伊に特有の何楠といふ人名についての又一案」(岩橋小彌太、同誌)は一說を提出して夫は古く女小供を何古會何屎と呼んだのと何か關係があらうと云つてゐる。次に歌舞演劇方面では「能面の始源」(岩崎眞澄、思想)は翁系の面は能面の原型であつて恐らく鎌倉時代に入つてから出來たものであらうと云ひ「能面作家の研究」(同人、史學)は之を傳說推移創作興隆模作の五時代に分つて各時代の特色と作家の事を說き「蜘蛛舞に就て」(岩橋小彌太、風俗研究)は此舞は上代散樂の遺風であらうと言ひ「近松が世話物の展開」(藤村作、國語と國文學)は彼が作つた淨瑠璃の中、夕霧阿波の鳴戶迄を前期冥途の飛脚以後を後期として兩者の相違を述べ『紀海音の世話淨瑠璃』(同人、同誌)は彼の作風を近松の夫と比較し「淨瑠璃節攷源」(岩橋小彌太、風俗研究)は淨瑠璃は元琵琶法師に語られたもので從つて夫は平曲に似たものであつたらうと言つてゐる。更に美術建築の方面を見るに「繪卷物に就いて」(上野直昭、思想)は主として河本本及び曹源寺本の餓鬼双紙に就て述べ「桃山襖繪の

研究」(大類伸、史林)は桃山襖繪が有する特殊の意義及び文化史上此時代の特殊の立場を論じたもので當代の襖繪の代表者たる永德山樂の畫風を詳細に比較研究し更に山樂と彼以後の襖繪とを比較する爲め探幽尙信等の作に就て論じ「江戸時代の建築」(佐々木恒淸、歷史と地理)は其時代建築の傾向及種類を述べ種類は非常に殖え樣式手法等は漸次墮落したが實用向の構造意匠の方面は大に進歩したと言ひ、其他「大和繪と凹凸畫法」(梅澤和軒、中央史壇)「上代日本に於ける山水及び花鳥畫の發達」(梅川憲一、同誌)「鳥居流の研究」(藤懸靜也、國華)等がある。

〔松野〕

特に佛教美術史については「法起寺三重塔と藥師寺東塔との比較」(菅原明朗、佛教美術)は兩塔建築の手法を述べて後者から推して前者は法隆寺の塔より一段の進歩をしたものと考へられると曰ひ「榮山寺八角圓堂の意匠及び裝飾」(天沼俊一、同誌)は其の沿革意匠裝飾を詳說し少くとも奈良時代のもので內陣柱を側柱の半數とし、化粧屋根裏とし、構架法に新機軸を出し、側柱を少し內方に傾斜せしめて安定の觀を與へた如きは作者の技術の非凡を物語るものであると曰ひ「頭塔に就きて」(佐藤小吉、同誌)は東大寺南方の頭塔の周圍にある石佛の圖樣面貌等より見て天平のものであらうと曰ひ「淸涼寺の釋迦像」(源豐宗、同誌)は先づ其の傳來を述べ、臺座裏の銘文よりも齋然の弟子盛算の栴檀瑞像緣起を信賴すべきであると曰ひ更に原像の製作を西域と論斷して居る。「豐後の石佛に關する一考察」(濱田靑陵、宗教と思想)は九州に於て豐富に凝灰岩を產し奈良朝以前數世紀以來裝飾的彫刻を墳墓に適用し更に石人をも製作するに至つた技術の進歩がやがて優秀な幾多の凝灰岩石佛を產出した基礎的素養であると論じ「藤原時代に於ける淨土教美術と其の思想」(望月信亨、無凝光)は當期後半に常行三昧思想九品往生思想盛んとなり美術方面に現はれて前者の常行三昧堂、後者の九品淨土變、九體佛、聖衆來迎圖となつたと前提して叡山の三昧堂建立年代、樣式、遺物、內部の莊嚴を述べ次いで淨土曼荼羅、九體佛、聖衆來迎圖に付き詳說し最後に九品往生思想は常行三昧の純天臺思想

に對し純淨土的なれどもなほ觀念的傾向を帶ぶるのみならず亦造像起塔を以て往生の行業となすが如き皆未だ聖道門的遺風を脱しないものと認められると結び、「常行堂の研究」(塚本善隆、藝文)は叡山等の建立の事から內部の莊嚴に及び本尊は彌陀を中心とする五尊形式のもの、多いのは五尊曼荼羅の形式を踏襲したもので天臺宗の修行道場が密教思想により安置せられた極樂教主彌陀を本尊として佛名を唱へ往生の業を修したものであつて當時のルーズな宗教感情の反映として又日本天臺の性質の具體的表現として興味あるものであると曰ひ「三千院の來迎彌陀三尊に就いて」(源豐宗、中外日報)は撰集抄の安養尼小野住居の記事より見て惠心が妹安養尼の爲めに建立したこの寺傳は相當根據なるものにして極樂院の建築は藤原初期と見てよいと曰ひ次いで本堂が阿彌陀堂の形式なる事舟底天井が中尊の光背に一致せる事及其の相貌より見て中尊も建築と同時代ならんも兩脇侍は其の憐憫に充てる眼、救濟の一念に燃へし口が末期の時代精神を反映して居る事、臺座に於て中尊は裳懸座脇侍は蓮華座なる事、及び來迎佛彫刻の創始時代より考察して兩脇侍は末期の附加であると曰つて居る。「木喰上人の彫刻」(柳宗悅、女性)は從來世に知られなかつた木喰(享保—文化)作の數十體の佛像に就て述べたものである。〔勝峰〕

印刷史の方面では「兵庫の古版本について」(新村出、歷史と地理)は堺で正平版が出來たより十二年前の文和元年に兵庫福嚴寺で佛燈國師語錄が開板された事を述べて更に之より五十八年後の應永十七年に周防の道雄居士の施財に依つて開版された元版覆刻本の藏乘法數の事に言及し、「近世の出版界」(中村喜代三、歷史と地理)は文祿役後支那活字印刷法の將來は江戸時代文藝復興の導火線となつた事慶長五年出版の六臣注文選は我國銅活字版の最初のものであり同十三年出版の伊勢物語は平假名を用ゐた最初の出版物である事其他書籍業の組合制度等に關し叙述して居る。〔松野〕

更に宗教史界に眼を轉じて先づ神道及神社の方面より一瞥すると「神祇史の研究」(宮地直一)がある。收むる所八編。其の中「熊野詣と熊野山」は未だ從來發表せられな

かつたもので外的考察として御幸の費用、道中の有樣、一般の交通情態、先達の事を述べ內的考察として三山の統治組織、行者に對する設備、御師等の事を詳說してある。「日本農業神話の研究」(津田敬武、中央史壇)は保食神、稚產靈神は共に說明神話なれども前者は幼稚にしてアニミズムの思想を有する先住民の神話で後者は支那の五行思想を背景とする天孫民族の神話であらうと曰ひ「日本神祇祭祀と支那古典に見えたる神祇崇拜」(中澤見明、史學雜誌)は學令により禮記左傳の傳來を古きものと推定し其の思想と日本の神祇思想との交涉を檢討し天子の禘祀、太陽崇拜、五色の幣帛、犧牲、日本の古代葬式、祓除、諾尊黃泉行物語等について述べたものであり「神祭に對する韓土文化の影響」(山口銳之助、歷史地理)は前年陵と神道と題して同誌に發表したもの續きであつて祭政一致時代祭神組織に於て重要な陵が外來思想殊に佛敎の影響を受けて忌まれ延いて神靈迄が排斥せられるようになつたと主張して居る。「日本人の宗敎生活の原始と其年代」(福原武、中央史壇)は齋瓮及び武器による祭

祀、鏡崇拜の由來及び其の年代を考證したものであり「新年祭の意義に就て」(橋口長一、人類學雜誌)は蝗驅除祭を原始的形式として進んで御年神を本體として月次祭の要素が加はり更にあらゆる神に農作物の豐穰を祈るようになつたと述べて居る。「伊勞神宮の御鎭座に就いて」(喜田貞吉、歷史地理)は佐那縣の考證に依り記紀等の五十鈴川は今の宮川であつて五十鈴川上の磯宮は卽ち宮川のほとりであらうと述べ、これに對して「磯宮及び五十鈴川について」(大西源一、國學院雜誌)は狹長田卽佐那縣說を否定し五十鈴川卽宮川說を反駁して居る。「天武天皇時代の皇靈の祭祀」(山口銳之助、歷史地理)は前年の陵と神道の續きで、上古からの陵を尊ぶ國風に支那の風が加味せられ陵の親謁皇祖の祭典が盛んとなつたと曰つて居る「春日神社の成立」(宮地直一、歷史と地理)は元來中臣氏の氏神は河內の枚岡神社であつたが利根河口に於て中臣氏が發展すると共に鹿島香取を尊信し奈良奠都後間もなく三笠山麓に是等の祭場が設けられ神護景雲二年に至り正式に鎭祭が擧行せられ次いで北家と關係ある文德帝の

嘉祥三年に恒例の官祭が始められ其の後北家隆盛につれて春日社及び其の分祀大原野、吉田兩社の繁榮した事を述べ「日光二荒山頂上發見品に就て」(古谷清、丸山瓦全、考古學雜誌)は大部分經塚關係品と思はれる二荒山神社所藏品の研究であり「日光山緣起について」(古谷清、同誌)は緣起の內容並に日光の遺物より此の傳說を考證して其の骨子は大和民族のアイヌ驅逐を意味したものが漸次變化發達して鎌倉時代に完成せられた者であらうと結んで居る。「宮座の研究」(中山太郎、社會學雜誌)は宮座は鄕村社以下の小社に多く存在し其の起源は氏神が產土神に變化する過渡期であるとし次いで其組織を多くの實例によつて詳細に說明し「神宮御柚山の變遷」(大西源一、史學會々報)は神宮經濟上最も重要な造替遷宮に關係の深い御柚山特に伊勢の江馬、大杉の兩御柚の變遷を述べたものである「神佛習合思想の完成」(寺本慧達、國學院雜誌)は外來の宗敎思想が在來のそれを變更し得るものでなく後者が前者を適合變化せしめるものであるこの見地に立つて習合思想を說明せんと試み、神格佛格の概念の混合が第一階梯であつて奈良朝前期には神佛兩格及び佛敎の諸善神の感情的融合を見、次いで神佛の行儀的混合を來し更に習合思想に對する合理的解說を要求するに至つたと述べて居る。「山王一實神道」(多賀義仁、龍谷大學論叢)は前年からの續きで前年は主として敎義方面を述べたが今回は山王廿一社の本迹緣起を述べて居る。「水平社の氏神八幡宮」(赤堀又次郎、歷史地理)は特殊民の種類を略說して後隼人の祖先なる海幸彦を服從せしめた山幸彦を祀り且つ南洋原產の竹を神木とする八幡宮を氏神とする事、竹細工及び漁業等に於て隼人と特殊民との共通する事を指摘し最後に種族的差別は漸次解放せられ職業的分化から特殊民が發生したと結んで居る。「後奈良天皇宸筆心經と信濃諏訪神社」(渡邊世祐、國學院雜誌)は天文廿二年八月宸筆心經の奉納せられた經過其れに關連した禁中修理費進獻叙位宸筆神號下賜等の事情を研究したものであり「唯一神道と法華三十番神」(廣野三郎、國學院雜誌)は明應六年二月吉田兼倶が京都の妙本妙蓮本圓の三寺に向ひ三十番神に關する質問を發した目的は

彼が嘗て神道進講の際三十番神に就き叡聞に達した事を述べ皇室の威光に據つて日蓮宗に自家の神道說を强要し勢力擴張を圖つたもので其の後日蓮徒を懷柔し兩者の間に親密な關係を持續したと述べ「山王神道と東照宮」(古谷淸、歷史地理)は天海の山王神道完成は眞名東照宮緣起上卷の出來た頃卽ち寶永十三年の遷宮並に廿一回神忌の行はれた頃であらうと述べて居る。「神輿の變遷」(出雲路通次郎、歷史と地理)は其の起源を說き乘輿、高御座、宮殿、三系統を擧げて其の變遷遺品に及び「祭禮風俗考」(藤澤衛彥、中央史壇)は諸國の祭禮風俗を趣味的に研究し古式の漸次衰滅せんとするを記錄に留めんとの試みでこれには唯神田祭に止めて居る。「祇園山鉾の沿革」(若原史明、風俗研究)は幸の鉾が鎌倉時代に劍鉾となり足利中期に大體今日の如き鉾車となつた經過を詳細に考究したものであり「風俗史上より見たる津島祭」(佐藤好道、同誌)は前々年からの續きで同祭禮の事を叙述して居る。次ぎに佛教史に眼を轉ずると、單行本としては佛教古典叢書の第五編「古本漢語燈錄」第六編「明義進行集」佛教史籍叢書の一部「蓮如上人法語集」が發行せられた、後者は收むる所空善聞書、蓮如上人御物語次第、榮玄聞書、蓮如上人御往生之奇端、蓮如上人御若年ノ砌ノ事、蓮如上人御遺言の六編であるが其中空善聞書は從來世に知られなかつたもので本書は天文頃の寫本に據つて居る。「日本佛教文化史の研究」(橋川正)に於ては著者が最近諸雜誌等に發表した長短六十編を略年代順に收錄せられ「眞宗教義及眞宗史」(廣瀨南雄、橋川正)は頗る要領よく通俗的に叙述せられて居る。「石山寫經選」(太屋德城)は石山寺の一切經中より書風變遷を考ふる徵證となるもの、史料として價値あるもの及び逸書等を撰び六十五葉のコロタイプに附したもので卷頭に當一切經の成立內容學術的價値について說明を施してある。「高野山金石圖說」(水原堯榮)は碑燈籠磬擬寶珠扁額の銘を收錄したものであるが三分の二は町石卒都婆碑以下の碑銘に費されて居る。次ぎに雜誌等に發表せられたものを先づ典籍及史料の方面から見ると「聖德太子傳の研究」(橋川正、「史と地理」)は太子傳研究史料として獨立せる法王帝說、「上宮記」上宮

皇太子菩薩傳、上宮聖德太子傳補闕記、聖德太子傳曆の解題であり「法寶撰涅槃經疏の日本傳來に就て」(大屋德城、朝鮮)は天平七年玄昉歸朝の時、少くとも天平十二年以前に日本に傳來し平安初期迄存在したと曰ひ「窗然法橋在唐記の逸文」(橋本進吉、密教研究)は心覺の鵝珠抄(雜祕要記祕密雜要鈔心目鈔)所引の在唐記逸文を紹介し「寺門高僧記について」(岩橋小彌太、佛教研究)は本書の現存せる卷を紹介し其の內容の特徵等を述べたものである。「印信の形式に就いて」(中村直勝、歷史と地理)は醍醐寺所藏の印信の形式を述べ更に印信が他の傳授關係文書に及ぼした影響を述べ「往生傳に就いて」(小酒井儀三、同誌)は日本往生極樂記以下七往生傳を解題し更に目的體裁等を述べ載錄者の種別を表示して居る「般舟讃の發見者について」(廣瀨觀友、中外日報)は續選擇の著者靜遍を以て仁和寺に於ける般舟讃發見者とする山田文昭氏の說に疑を狹み從來西山派にて傳ふる善惠發見說を支持したものであり「九卷傳に就ての疑問」(富森大梁、同紙)は古來勅傳の草稿本として舜昌作とすれど九卷傳は西山證空を詳說し勅傳は鎭西聖光の傳に特に意を用ひた形蹟より見て法然滅後百年頃より盛んとなつた正統論の現はれであつて著者も異なると主張し「法然上人眞影」(藤堂祐範、同紙)は大阪一切寺藏家康寄進「寄合書阿彌陀經」と題する心經との合本卷子本が一行一筆約百卅餘の名僧の筆になり其の中に源空の署名ある一行の存する事を紹介して居る「教行信證論歸結に就いての私見」(本多辰次郎、歷史地理)は喜田博士の難點のあらゆる點に答へたものである「曇鸞傳贊」(梅原眞隆、親鸞聖人研究)は論註奧書は親鸞自ら淨土論を見て書き其の後眞像銘文に依用したものなりとして中澤氏の見解を駁し更に高僧和讃、略文類と對照して淨土論閱覽の時期を建長七年から正嘉元年迄の頃と推定し。「本願寺本教行信證點注の筆者に就いて」(吉澤義則、龍谷大學論叢)は朱字音訓の三點は朱色を異にする事等より見て數度に加へられた事、三點同筆らしきこと及び假名遣より見て親鸞の自筆に非ざる事、字體假名遣法語法より見て親鸞時代或は寂後間もなく加點せられたらしい事を考證したものであり「歎

異鈔の體制につきての私見」（梅原眞隆、同誌）は後部十ケ條は欺異の當相前部十ケ條は欺異の基準にして第十條の「そも〳〵」以下は後部の前置の詞であり總結に曰へる「大切の證文」は別冊附錄を指すもので本願寺藏蓮如上人眞蹟本の最後に記す法然等配流の記事は其の一部であるこ主張し更に異說の批判に及び「欺異鈔撰者に關する梅原氏の示教を讀みて」（中澤見明、同誌）は唯圓如信覺如等の合成物であり結文の信心諍論の物語は恐らく後人の加筆であり且つ安心決定鈔こ共に覺如に依り本願寺に相傳せられた當流大事の聖教であらうこ述べ。「存覺一期記」（松野遮崇、歷史こ地理）は此書の中には僞作攙入せられた所があるやうであるこ云つて居る。「大乘非佛說論の歷史」（妻木直良、龍谷大學論叢）は大乘小乘の起源より說き起し印度支那の小乘敎徒の大乘非佛說論を述べ日本に於ては突然富永仲基の出定後語の現はれた事を說き慧海ここの論諍の批判に及び「富永仲基の佛敎研究法」（内藤虎次郎、同誌）は彼の隨筆翁の文等によつて其傳記を述べた後、從來佛敎の史的研究が異部集輪論に拘泥したに反して彼は加上、異部百字、言有三物の三原則を研究法の基礎こして自由研究を爲したこ曰ひ更に彼の神儒に對する態度にも說き及んで居る。「佛敎學上に於ける自由討究の先驅服天游こ其著書」（上村觀光、禪宗）は赤裸々によりて彼の思想を窺ひ、諸家人物評及藤門居士法語の奥付出版豫告によりて彼の著書を擧げたものである。次ぎに僧傳に關するものを擧げるこ「東大寺法蓮の敎學に就て」（島地大等、哲學雜誌）は鑑眞門下の高足法蓮が何故に沙彌十戒威儀經の如き初步の經文の疏を作りしかの疑問を提示し、こは戒律道德の民衆化、敎界の墮落に對し反省を促すにありこし更に内外典大小乘等あらゆる經論を引用せる當時こして特異の註釋態度は自ら立てる敎學卽天臺の宣明こ同立場より時代敎學に對する批判を爲すにあつたこ曰ひ「德一こ修圓この關係に就いて」（櫻井圓信、叡山宗敎）は兩者の年代及對傳敎態度より見て師弟關係を見出す事が困難であるこし「高山寺喜海の在世年代」（高瀨承厳、佛敎學）は靜嘉堂文庫藏華嚴經疏の自筆識語によつて彼の生年を治承二年こして居る。昨年は法

然の淨土宗開宗七百五十年に相當したので主として淨土宗方面で法然に關する研究が可なり多く發表せられたが殊に無礙光が特別號として「我祖法然上人」を發行した。其の中主なるものを擧げると「佛教々理史上より見たる法然上人」(椎尾辨匡)は人間宗教を高調した事を曰ひ「宗祖修學當時の叡山の狀況」(岩崎敲玄)は度牒受戒の制度の紊亂、僧兵の横暴を述べ「叡空上人と源空上人」(田中智肇)は源空は源光、皇圓を經て叡空に入室したのではなく最初より叡空に入室し剃度を受け十八才に隱遁したと主張し「法然上人遺文開題」(望月信亨)は醍醐本法然上人傳記、西方指南抄、漢語燈錄の開題を爲し「選擇集流傳史稿」(石井敎道)は思想史的に見たもので成立期奉戴期沈潛期を擧げ「法然上人と圓頓戒」(大野法道)は法然が圓戒傳承者なる事及彼が授戒を行つた事蹟を述べ最後に勸戒と宗意との矛盾に對する說明を試み「畫人としての法然上人の研究」(伊藤祐晃)は法然の諸傳記、康富記、後奈良天皇宸記等により畫人としての法然を闡明せんと試みたものである。此の外「法然上人門下列表」(高瀨承厳)「宗祖上人と法難」(大島泰信)「法然上人と惠心僧都」松田貫了)「法然上人と日蓮聖人」(今岡達音)等があり、最後に「法然上人年譜」(望月信亨校閲・成田良穂・江川月泉共編)が添へてある。「法然上人開宗の年代に就て」(原田霊道、佛教學)は諸傳記を檢して開宗と見るべき事實を求め二祖對面の靈夢のあつた承安五年三月を以て開宗の時期と見るべきであると主張し「法然上人の系圖に就て」(伊藤祐晃、同誌)は法然の生家漆氏を以て漆部とし美作の漆部と加茂社との關係を考證したものであり「實範と法然上人」(同人、中外日報)は臺記天養元年九月十日の條に實範入滅を傳ふればこれ法然十二才美作に在りし時なれば兩人の關係を說く源空聖人傳を誤謬と斷じ、醍醐本法然聖人傳により誤傳の原因を指摘し「宗教改革者としての法然」(矢吹慶輝、宗教と思想)は世界の宗教思想の推移を大觀し、法然とルーテルを比較し法然の主張の中心は祭司的宗教に代ふるに平等普遍主義を以てした所にあると高唱し「人間としての法然」(三浦周行、藝文)は先づ一般宗祖に對する史家の研究態度を述べ其れ

に關連して愚管抄慈鎭著作說に對する淨土宗側の駁論に答へて後、法然の開宗に際しての宗祖通有の多大の苦心迫害に對し同情を寄せると共にかかる際にも毅然として世間の名聞から遠ざかりつつ撰擇集の著述に胸中の蘊蓄を傾けて一宗開立の基礎を築いた所に彼の眞面目を見出し人間としての法然に多大の敎意を表すと結んで居る。「捨聖一遍に就いて」(高千穗徹乘、龍谷大學論叢)は彼の一族及佛敎界の有樣を述べ次ぎに空也、敎信を先覺者と仰ぎ證空門下の聖達、華臺、長門の見性、由良の法燈との交涉を述べ高野の道範との關係を否定し更に信仰、生活を述べ「親鸞聖人の奇蹟」(梅原眞隆、親鸞聖人研究)は越後の七不思議に就いての考察であり「親鸞聖聖人の妻帶問題に就いて」(喜田貞吉、中外日報)は井上右近氏に答へて惠心尼、慈信房の生母、今御前、卽生房の母、彌女の生母、慈信房繼母等親鸞と關係ある婦人を列擧したものである。「文觀僧正に就いて」(小原洪秀、密宗學報)は傳燈廣錄、寶鏡鈔等の文觀に對する惡評は多少割引すべきであると述べ「彈誓と澄禪」(福原律太郎、中央史壇)は飯沼の鎭譽祖洞の門人彌念を開祖とする淨土宗の捨世派の彈誓(箱根阿彌陀寺中興、慶長十八寂)及澄禪(約六十年後出世)の奇蹟的傳記を叙し「願海傳史料」(藤堂祐範、藝文)は從來傳記の詳かでなかつた幕末の天臺僧で大行滿を成した同師の傳を「忘形見」等の新史料で闡明したものであり「慈雲尊者と宮中との關係」(長谷寶秀、密宗學報)は桃園帝御母開明門院の御願により十善法語を說いた事を中心として同皇后恭禮門院、女官等を敎化した有樣を述べて居る。次ぎに寺誌及遺跡の方面を見る。「四天王寺造營の精神」(鷹谷俊之、現代佛敎)は四天王寺は傳說の如く物部氏討滅の際の發願に依るものならんも其の四院は其れ以後恐らく勝鬘經の十八受章の刺戟によるものであらうと曰ひ「鑒眞和上の戒壇に就いて」(松本文三郎、史林)は彼の建てた南都の戒壇は唐の道宣の制に倣へるものなるが道宣の戒壇に對する見解は戒壇圖經等よつて窺ふに制多(塔)卽戒壇なりとの誤解に基く謬說なる事を考證したものである。「叡岳橫川根本如法堂址の發見」(中村直勝、梅原末治、岩橋小彌太、歷史と地理)は慈覺大

師の如法經等を納めた同堂趾の發見の經路發見遺物沿革等を記し「横川經塚」(廣瀨都巽、考古學雜誌)は如法堂發見遺物を紹介し「經塚と其の發掘遺物に就いて」(高橋健自、中央史壇)は中世の遺物たる經塚の存在する位置及構造を說き更に發掘遺物の學術的價値に論及し「攝津國三島郡忍頂寺の沿革」(橋川正、歷史地理)は傳燈滿位僧三澄の貞觀二年の奏言により彼の建立した神岑山寺を御願眞言の一院とし忍頂寺と改稱し其の後仁和寺の司配となり平安中期大法師源因と曰ふ西方願生者が住し鎌倉時代に叡尊の訪れたこともあるが山頂の寺院の廢絕してから現地に移り高山右近以後殆んど廢寺となつたと述べ『安祥寺建立年代に就いて』(服部如實、密宗學報)は諸說を排して安祥寺資財帳の嘉祥元年說を正當と主張し「百萬遍知恩寺」(伊藤祐晃、歷史と地理)は度々の移轉の有樣、賀茂社、知恩院、信長、鳥居元忠との關係を述べ「丹波安國寺について」(魚澄惣五郎、同誌)は尊氏の外戚上杉氏の氏寺の如き光福寺が貞和二年安國寺に選定せられ寺運興隆を見た經過と其の後の變遷を詳說したものである。其他以上の分類に入らなかつた主なものを擧げると「佛敎を弘通したは信仰か政策か」(赤堀又治郎、中央史壇)は先づ宗敎の本質を一言し日本の各時代の宗敎思想の變遷を說き對佛政策を大觀したものであり「十念極樂易往集と藤原兼實の信仰に關する疑問」(大屋德城、史林)は玉葉の記事及び彼が深く歸依した佛嚴の著作十念極樂易往集の性質より見て兼實の信仰が一向專修念佛でなかつた事を述べ「所謂特殊民の由來を述べて其の念佛宗との關係に及ぶ」(喜山貞吉、宗敎と思想)は特殊民の由來を略說し次いで彼等が念佛門殊に空也親鸞一遍の門流に依つて救濟せられた事を述べ「德川時代に於ける公武兩家の日蓮宗信仰」(景山堯雄、法華)は德川一家池田伊達前田淺野家の婦人の間に主に信仰せられた事實及び皇室公卿の信仰を述べたものである。「日本佛敎敎學史上に於ける悉曇研究の發達」(推尾辨匡、密敎研究)は安然の悉曇藏が根本であつて平安朝一大發展をなし鎌倉時代は其の繼承であり南北朝には金剛藏が斯學の寶庫となり德川時代に隆盛を來した悉曇は過去の遺物であるが其の研

究は印度佛教の正確な知識を與へ佛教復活の媒介となつたと曰つて居る。次ぎに基督教史方面は例により寥々たるものであるが其中特記すべきは「南蠻更紗」(新村出)の出現である。本書は「南蠻記」の妹姉編として主に「切支丹追懐と異國趣味」に關する從來發表せられた論文を集錄したものであつて「雪のサンタマリヤ」「吉利支丹文學斷片」「遵主聖範の舊譯本」「切支丹の遺物」「日本最古の銅版畫」「南蠻趣味と和歌其他」「眞宗と切支丹」「時計傳來の歴史」等は本項に關係深いものである。次ぎに「景教碑と切支丹墓碑」(濱田青陵、宗教と思想)は後者が淨土宗寺院に多く發見せられた事、平假名及草書體を採用せる事、多く西洋石棺の脱化と思はれる蒲鉾型なる事等を注意し「靜岡市の耶蘇地藏石燈籠」(藤堂祐範、中外日報)は秀忠の生母西郷局の菩提所寶德院に現存する竿の部分が十字形を爲し其所にマリヤと思はれる像を彫刻した織部形石燈籠の紹介である。〔勝峰〕

最後に史料に就ては先づ昨年の史界を賑かした古事記問題を擧げねばならぬ。その最初に現はれたのは「古事記は僞書か」(中澤見明、史學雜誌)と題した論文であつて古事記の編纂が和銅四五年の事であるのに、他の國史には之の記事がなく、萬葉集の編者も此書を知らない抔との數點から齋部氏が古語拾遺を選述したに對して中臣氏が古事記を僞作したのであると言つたのに對して逸早く反對意見を發表したのは「古事記僞書說について」(安藤正次、同誌)である。それには中澤氏の說は沼田順義の戸級長風のはしがきにある說以來一部の人々の間に抱かれた說を新しい光の下に組織立てたにすぎないと言つて紀に記の記事のないのは紀の編纂が餘程前から着手された爲めで、萬葉集に含まれた古註の中に古事記の存在の見えることを抔一々の條項に就て反駁を加へた。中臣氏は古語拾遺に對抗して記を僞作するには餘りに有利な地位にあつたと言ひ「古事記の實質と傳錄の事情」(木村春太郎、同誌)を述べて古事記は日本紀編成に資するために勅語舊辭を整理記錄されたものであるから記の撰錄の事が國史に載せられないのは當然の事であるとして記肯定說を支持した、新に出た史料を說明したものに「九條

本古寫延喜式の一斑に就きて」(同人、史學雜誌)その寫されたる年代を長和年間以後王朝以前のものであると斷じて居る。「戰國時代に於ける神宮關係の新史料について」(牧野信之助、史學會々報)は近江下鄉共濟會文庫の所藏に歸した文書の中神宮關係のものを說明したもので「河野氏文書について」同人、歷史と地理)は近江犬上郡明照寺から出た伊豫の河野氏に關係ある文書九通を學界に提供したものである。「愚管抄の著作年代についての疑」(津田左右吉、思想)と題し、承久亂後の著作であつて著者はそれを變亂前に書いたかの如くに裝つたものであるまいかこの一案を出したのは「水藩密訴問答に就いて」(井野邊茂雄、國學院雜誌)研究し同書は寫延元年三月以後の作で烈公反對派の策によりて流言を利用し宜傳の目的で作られたものであると言つたのと共に史料の價値を批判した一例である。而してこの史料に關する方面で最も著しい事は大震災によつて失はれた史料に對する追憶である。卽ち「失はれたる近世法制史料」(三浦周行、法學論叢)の最後を吊はんがために、往年調査の備忘錄によりて、評定所記錄を初めとして寺社奉行所、以下の諸官衙の編纂せし諸記錄中の亡失せしものについて編纂の由來、方法、體裁等を示し、其中京都帝國大學の爲めに謄寫せるものゝ解題を試み、別に評定所記錄に混ぜる諸藩律の梗概を示し、藩制史研究上の一大光明であると言つて居る。而して「燒失せる東大附屬圖書館所藏貴重書のうち「一般史學關係」のもの(史學雜誌)「文獻の喪失文化の破壞」(大森金五郎輯、中央史壇)に燒失せる貴重書目を揭げたのは、「國語研究室燒失主要書目錄」(國語と國文學)と共に實に後世への記念すべき記錄であると共に好い試めでもある、それから何故に今迄現はれないかと期待された大阪町繪圖の古版を蒐めて解說したものに「古版大阪地圖解說」(在古慶三)がある。その中に從來大阪最古の町繪圖として知られた明暦三年板の新版大阪之圖以前に明暦元年の新板摂津大坂東西南北町島之圖のある事を紹介し、且つこれらは何れも後世好事家の假作であると斷定して居るのは「大阪地方古代沿革概說」(喜田貞吉、大阪文化史論)に於て、世間に流布する難波古圖は

恐らく寛政頃に寂聞聖觀又は金剛輪寺の曇峰阿闍梨等が僞作したのではないかと言つて居るのと併せ考へて、古地圖の性質を知るべきである。また、古典保存會が眞福寺の古事記・日遊や、千葉家所藏の大鏡を玻璃板で出刊した事、史料編纂掛が『古簡集影』の出刷を始め「律斷簡」「後漢書斷簡」「弘仁式主稅斷簡」を復製した事は、また大震災の教訓に刺激された出版の一つといへやう。史料編纂掛は昨年に於て「大日本古文書」は「毛利家文書四」「幕末外圖關係文書十七」を「大日本史料」は第六編廿一、第八編九を刊行したにすぎなかつた。最後に地方誌に關するものとしては「日本國誌資料叢書」が信濃、佐渡、越後を出し「伊豫史精義」「神戸市史」「南桑田郡誌」が出來たのは吾人の管見に入つたものである事を附記する。〔中村〕

朝鮮史　一昨年開講した朝鮮史講座（以下便宜講座といふ）も愈昨年十一月を以て完結を告げたが斯學研究の機運は益旺盛である。先づ政治經濟方面に於て「在滿朝鮮人の現狀と其の救濟策」（末廣重雄、經濟論叢）を論じて生命財産の保護の爲警察力を增加し福利增進の爲金融教育救療の施設を完備すべきを說いて居り、「李朝政爭略史」（小田省吾、講座）を概說して道學名義文詞刑獄等の理由より黨派を生じ儒學派、外戚の爭新舊の不和が國家を亡ぼしたゝといつて居る、世宗の八年より開港したる齊浦鹽浦釜山浦の「三浦と三港」（幣原坦、東洋）の釜山仁川元山の沿革を論じたのがあり、一般史特に古代史にては「朝鮮の傳說につきて」（近藤時司、同誌）興夫傳と腰折雀、浦島傳說、桃太郎と桃花女傳說等九項に亙つて日鮮兩國の古傳說を比較したのは、「朝鮮牛頭山由來」（本田恒之、同誌）を探つて江原道春川郡牛頭山が書紀の會尸茂梨に當ると謂つて居るのと双幅である。「二千年前南朝鮮の回顧」（藥師寺知朧、同誌）は朝鮮姓氏の起原を朴姓であるとし之が瓠公に緣由すれば金姓も亦日本人を祖とするのかも知れぬと說き「朝鮮の迷信と鷄龍山」（李覺鐘、朝鮮）は夫が新羅の僧道詵が唐より風水地相術を傳へたるに起るとなし、山の位置を忠淸南道に擬し之が變通して天黃地敎、崇神人組合、侍天敎、檀君敎を分派したと謂つて居る。「三韓の歸化人」（三浦周行、講座）は我招聘によるもの、皇

化を慕つて來たもの、我軍の捕虜となつたもの、三種に大別して我は何れも之を歡迎して學術工藝の進歩に寄與させ 知識階級の者を中央に然らざる者を拓殖の餘地ある地方に置いたが、彼等子孫も初めは好んで我に歸化したけれども日本が國民的自覺の高調するに從つて歸化民だるを嫌ふ風を生じたと論斷し、「朝鮮上世史」(小田省吾同誌 は新羅の分裂迄及んだ。「朝鮮中世史」(瀨野馬熊、同誌)は成宗の改革より元の日本入寇と高麗との關係に及び、「朝鮮近世史」(同人、同誌)は天主教の傳播と西洋文物の輸入に及び「朝鮮最近世史」(杉本正介、同誌)は保護政治と韓國に及び「朝鮮民族史」(稻葉岩吉、同誌)は朝鮮民族の構成より貴族政治時代を說き「日鮮關係史」(栢原昌三、同誌)は滿洲軍の南下を說く、「鮮滿關係史」(稻葉岩吉 同誌)「財政史」(麻生武龜 同誌)「美術史」(關野貞、同誌)「中央並地方制度沿革史」(麻生武龜、同誌)「教育制度史」(小田省吾、同誌)等皆興味津々たるを覺える。現代化した日本人が南より、家族制度に對して時代的順應性を發揮した支那人が北より、並に朝鮮人の生活を脅かしたならず早婚多子の爲經濟的に困却したことを指摘して居る「朝鮮の家族制度問題」(稻葉岩吉、東洋)、王室懿親兩班鄕班中人庶孽常民賤民の因襲的「朝鮮の社會階級」(田中德太郎、同誌)を闡明して居るもの、男女の協同生活 大家族制の保持に努むる「朝鮮の生活樣式」(村山智訓、同誌)、「朝鮮の宗教と迷信」(西崎一夢、國際智識)の一般を述べて居るもの、皆有益な讀物である。歷史地理方面にては「小黑山島」(松井等、東洋)は揚子江方面と朝鮮間の古代航路の要衝に當り南宋高麗間の航路目標として重んぜられ元が至元五年に黑山海道を調査した理由を討ね、花源半島の「鳴洋峽の海戰と統制史李舜臣」(栢原昌三、講座)の智謀を論じて閑山島を日本軍に奪はれて後の全羅右水營の重任を彼が潮流を利用するによりて成功せしめた經緯を叙し、「京城に於ける文祿役日本軍諸將陣地の考證」(小田省吾、同誌)を爲して宇喜田秀家李如松の朝鮮ホテルの地を始め一々其遺址を指摘して居り、「蔚山城址と淺野丸」(瀨野馬熊、同誌)を調査して淺野丸を伴鴉亭に擬し

て居る、其古きものには新羅百濟の古地名をチャム語にて說く「三韓古地名考」(坪井九馬三、史學雜誌)、新羅朝の慶州「石窟菴の境內に於ける古代の石垣及古塔」(渡邊彰、朝鮮)を調べて其の境域を考へたのがある。傳記には突厥族の傑氏が元末に紅賊に追はれてカラチンより高麗に移つた「朝鮮に於ける高昌の傑氏世系」(稻葉岩吉、講座)「文成公安裕の影幀に就いて」(栢原昌三、同誌)公が高麗の元宗忠烈王に歷仕して朱子學を鼓吹した顚末、新羅人なる「海東華嚴初祖義湘大德の事蹟及敎義」(今津洪嶽、觀想)普照國師に仕へて元廷と特種關係のあつた「高麗の才人僧宓菴」(高橋亨、東洋)圓鑑國師の閥歷を叙したのがあり賴山陽と同時代の人「洪耳谿の事蹟」(松田甲、朝鮮)として治水植樹の偉業を數へたのがあり、文敎に於ても「朝鮮學藝史」(洪憲、講座)は李朝の儒學淵源、「朝鮮佛敎史」李能和、同誌)は百濟より日本へ傳法した僧侶「朝鮮儒學大觀」(高橋亨、同誌)は高麗李朝の儒學、「朝鮮の文藝」洪憲、東洋)は麗玉女の系統引、高句麗琉璃王の黃鳥歌、以下新羅文武王の學校の整備學者文人の輩出、「寧濟歌に就

て」(石川義一、朝鮮)之が平安北道隨一の民謠であること、朝鮮人の日本に贈した歌謠」(小倉進平、東洋)として王仁の歌、倉柴紀の畝傍山の歌、薩州伊集院村の玉山社祭禮の歌詞を數へたのがあるが皆好文字である。「朝鮮文廟及歷應儒賢」(小田省吾、魚允迪)は李朝太祖六年以來の文廟の歷史である。其の他蒙古語系に屬する「朝鮮語の歷史的研究上より見たる濟州島方言の價値」(小倉進平、朝鮮)、宋學の影響に原因する「朝鮮巴紋考」(沼田頼輔、史學雜誌)全羅南道順天郡松光面「松廣寺の大般涅槃經疏について」(池田宏、朝鮮)之を開版當時のものとせぬ見解、「震災と鮮滿史料の佚亡に就て」(稻葉岩吉、講座)東京帝國大學所藏の李氏實錄以下の燒失を刻擧し、朝鮮に於ける日本語研究の歷史を討ねたる「朝鮮語學史」小倉進平、講座)などがある。以上は昨年に於ける朝鮮史界の收獲の一斑である。〔那波〕

東洋史界　昨年の我が斯界に、浮び出した幾多の論著を何くれとなく搔き漁つて、大まかな網で掻ひ上げてみると一般史の方面では、從來のものより幾分體裁を改め

た「東洋史精義」(西村爲之助)が「東洋史要」(市村瓚次郎)の增訂版と共に、普及されるに至つた外に、一般的な「支那文化史講話」(高桑駒吉)の刊行を見たことは、こゝに特筆に値するとして、他はいづれも特殊史の部類に入るべきものであらう。先づ支那を中心部に置いて、政治史關係のものから擧げ始めると、「殷周革命」(丹羽正義、支那學)はこれを界として、祭卜の世を政治のそれに、從つて傳說の時代を歷史のそれに、引き入れたものであると解した結果、史記の見方を難じてゐる。傳記としては「王佐の偉人諸葛孔明」(安岡正篤、東洋思想研究)、「司馬溫公傳」(內田周平、大東文化)、さては「淸太祖と李成梁との關係に就いて」(和田淸、史學雜誌)などある以外には、雨夜の星の嘆があるが、現代に關した時局ものに至つては、排日問題が下火となつた代りに、昨秋捲き起つた動亂を中心として、雨後の筍も管ならないものがある。かうした總ては割愛しても、支那に必要なのは「支那當代新人物」(淸水安三)「支那新人と黎明運動」であらう。近世史の特色たる外國關係に至つては、「支那國際關係概觀」(齋藤良衞)がある。また列强が支那に於ける勢圈の擴充、利權の獲得に就いては、十九世紀以來現今に至る「支那ノ鐵道ト列國」(木村增太郎、東亞經濟研究)との交涉にも注意すべきであらう。國家としては脆弱な支那も、社會としてはその和合に、意外な底堅さが潛んでゐる。さうした和合の淵源を社會史の方面から尋ねてみると、支那古代の里社(松井等、日本敎育)に行き當るであらう。この里社に胚胎して、「古代支那の地方自治的慣習」(同人、パンフレット)が生れて來る、秦の統一以後に於ける社會的方面の考察は、却て「史記ノ漢高本紀ニ就テ」(稻葉岩吉、東亞經濟研究)、これを徵取することができる、高祖の姓の判然しないこと、その壯時に無賴であつたことなど、この一篇に指摘されてゐる。降つて五代の時に存した無制限の責務の免除が、五代以前に存せず元以後に起らなかつたのは、經濟生活、時代思想等の點から深く考察すべき問題であらうこと、「支那に於ける德政に就いて」(加藤繁、史學雜誌)述べられたものがある。土匪の跋扈すること世界に冠たる支那の社會にあつては、「支那の匪賊と官吏」(石山福治、國學

院雜誌)とは、殆んど選ぶところがない。「支那の土匪に就て」(黃鶴山人、臺灣時報)その發生の原因、種類、並びにこれらの土匪に搾らるゝ階級などを考察したものもある。更にこれをば史實に基いて明確に論じたものは「支那土匪論」(矢野仁一、外交時報)である。支那の德治主義の政治は、支那以外に化外の民、治外の民を殘してゐる如く、支那の內部に於ても亦化外の民、治外の民を殘してゐる。それが卽ち土匪であると解し、この問題の解決には支那全國の心力を貫注しなければならないことを敎へてゐる。尙土匪に關聯して、滿洲の癌たる「支那馬賊裏面史」(矢萩富橘)のあることを附加して置かう。兎に角支那の正面的觀察は、常に誤り勝ちなもので、却て裏面的觀察の方が、普通の場合正鵠を得てゐるといふ見地から、「民族的に見たる支那」(永田善三郎、憲政)がある。彼等は國家の力に依賴せず、自分で自分の自衞手段を考へて、利益を保全しようとするのが、「支那人の生活信條」(松井等　日本敎育)である　僅か我が租借地の關東州に就いて行うたものであるが、大正九年の戶口調査の結果に基いて、「支那人

に關する統計的觀察」(宮本基、統計學雜誌)を試みたものがある。かゝる支那人の社會にも、猶太人は流れ込み、「支那に於ける猶太人の歷史」(支那)を作る。S. M. Perlmann のそれ(1913版)を譯出したのがこれである。また千八百五十年、上海から河南の首府に派せられた二人の支那人の「開封府に於ける猶太人狀況視察記」(同誌)もある。かく幾多この種の論著中、最も大なる收獲は、「支那人間に於ける食人肉の風習」(桑原隲藏、東洋學報)であらう。アラブ人の記錄に見えたるこの蠻風を、回敎徒の誤傳であらうと解釋してゐるReinaudの無知を指摘し、以てSulaymanや Abū Zayd の所傳の正確なることを證明し、その所傳の事實に解釋を與へ、同時に支那人の食人肉の風習を歷史的に究明したものである。法制史の方面では、「周禮冬官司空ノ官名ニ就イテ」(那波利貞、東亞經濟研究)少くとも春秋初期より周末迄は司工の官名が、前漢以後始めて司空のそれが、用ゐられるに至つたものであると解してゐる。先秦の稅法に關しては、「夏殷周の稅法」(戶水寬人、大東文化)がある。「漢代刑名一斑」(東川德治、法學

志林)は、肉刑・死刑、贖刑、作刑及び雜刑に就いての說明である。唐律の「鬪訟律斷簡」(史料編纂掛、古簡集影)は、史料としては意味があらう。唐律明律及び淸律の規定に基いて、「支那法と妖書妖言罪」(東川德治、法學志林)を述べたものがある。「明代ノ軍屯」(淸水泰次、東亞經濟研究)「明代ノ寺田」(同上)は、共に明代に於ける土地制度研究の一端であらう。歷代に通じたものでは、「支那各時代の敎育制度」(高桑駒吉、日本敎育)がある。「支那婚姻の序論」(田中忠夫、同誌)としては、支那に於ける婚姻制の沿革を述べてゐる。若し夫れかの名著「法律進化論」(穗積陳重)に至つては、支那の方面からも特筆すべきものであらう。經濟史關係の古代ものでは、「虞夏書に見はれたる政治經濟思想」(田島錦治、經濟論叢)と、「詩を通じて觀たる周代の經濟狀態」(小島祐馬、支那學)とがある。前者は最も進んだといはれる經濟上の學說が、政治上のそれと共に、往々にしてそれらの中に含蓄されてゐるのを味はつたものであり、後者は經濟に尤も緣遠き詩の如きものゝ間に、却て眞實を語つてゐるものがあるを引例してゐる。秦代になつてかの貝貨が、廢止されたといふは單に法文の上のことで、實際は漢代二百餘年の間に、漸減してその使用が止んだのである。併し雲南では獨り永くその流通を繼續して、淸の中葉に至つた。これを文獻に按じて研究したものに、「近代ノ貝貨ニ就テ」(田中忠夫、東亞經濟研究)がある。支那の南洋貿易が發達すると共に、宋人をして世界の通貨と公言せしめたほど、支那の貨幣は多額に海外に流出され、爲めに所謂錢荒時代を現出して、政治家の注意を惹くに至つた。これ卽ち「唐宋時代の銅錢」(桑原隲藏、歷史と地理)の研究が敎へるところである。こはまた支那に於ける外國貿易と正貨流出との關係の頗る有益にして興味ある研究問題なるを暗示してゐる。支那に貨幣の種類の多いことは、「支那の貨幣に就きて」(東亞同文書院研究部、パンフレット)を見ても知られる。かうした「支那の貨幣」(下田禮佐、歷史と地理)は、一には歷史傳說の爲め、一には國民保守思想のため、無比の混亂狀態に陷つたものであるといふ。支那に於いて商業の發達するに伴ひ、現金授受の制度より振替決濟のそれに入つ

た。「擬兌ニ就テ」(田中忠夫、東亞經濟研究)は、その進んだ後者を研究したものである。我が國の商業手形以上に、支那で使用されてゐる莊票に就いては、「莊票論」(西山榮久、同誌)を見ればよい。關稅鹽稅に亞いで、支那の財源とならうとする「支那ノ煙酒稅」(木村增太郎、同誌)は、その現狀を述べたものであるが、序言には歷史的の觀察がある。「支那關稅特別會議ニ就テ」(吉田虎雄、同誌)も、大に注意すべきではなからうか。所謂支那の火の藝術を、上古より清朝まで跡づけたものに、「友那窯業史論」(小村俊夫、同誌)がある。支那三千年の陶磁器を通觀して、量に於いて著しく多いのは明、清のそれであるが、質の最も秀でゝゐるのは宋代のそれである。土に對する土匠の敬度な愛と堅固な信念とで練られたためであるといふ。「支那ガラス工業ノ既往ト現在」(西山榮久、同誌)には、ガラスの名稱及びその傳來と製造などが述べられてゐる。「最近の支那經濟」(善生永助、東洋講座)、「對支經濟問題」(神戸正雄、時事經濟問題)「曹總統登臺後ノ民國ト其財政」(宮脇賢之介、東亞經濟研究)にも、またこゝに織り込まるべき事項が含まれてゐる。就中「支那に於ける產業並に經濟制度の沿革」(小島祐馬、支那經濟通說)には、尤も見逃すべからざるものであらう。儒教史に關しては、先づ「儒教のかたまるまで」(津田左右吉、史學雜誌)を考へたものがある。こは儒教が、戰國時代に一旦衰へて、漢代に至つて復活したと解する普通の說を斥け、戰國時代から發達して、漢代に漸く出來上り、今日の意味の儒教になつたものと見做してゐる。儒學史の上から見て重要な問題の一である「大學成立年代考」(武內義雄、支那學)は、大學を以て曾子門下の作と見做す舊說を排し、武帝以後の作と推斷してゐる。「政教の根本問題」(安岡正篤、東洋思想研究)も亦大學に就いて述べたものである。儒學でいふ「性論の起源に就いて」(宇野哲人、日本教育)は、その原因を以て、聖人學んで至るべきや否やといふことにあると解してゐる。「韓退之の原性論」(大西曉歡、密宗學報)は、それが性と情と價値とを混合せるを述べて、要するに性そのものは善でもなく惡でもなく又無價値でもなく、只非價値なる無記 indifference であらねばならぬと結んでゐる。宋の學者

の踏み來つた「疑經疑傳に就て」(諸橋轍次、斯文)、若くは改經に就いての風習は、それが主として五代亂離の樣威の失墜から生み出された一の現れであるといふ見解を說いてゐる。左傳が春秋の注釋書として、公羊、穀梁、兩傳よりも貴いことを宣傳した前漢末の劉歆以來、「左傳研究の二千年」(飯島忠夫、同誌)を通り來つて、その著作年代に關する中心問題に逢着し、それは天文曆法と陰陽五行說との解決に關すと見做してゐる。道教史關係のものでは、道佛二教の衝突した最初の現れである「老子化胡說の由來」(名畑應順、佛教研究)を究めようとしたものがある。「漢文學の內容、特に道家道教及び老子に就いて」(兒島獻吉郎、斯文)は、これら三者の關係を說いてゐる。老子の說は、高遠なる一の主義として、また一の學術として研究の價値あるも、道家は只これを擯いでその眞精神に觸れず、道教亦道家の或る部分を取つてこれを他のものに附け加へ、以て一の宗教としたものに過ぎないとの講演である。尙道佛關係の方面では、「道教と眞言密教との關係を論じて修驗道に及ぶ」(小柳司氣太、哲學雜誌)ものがある。廣く佛教史關係の方面では、龍樹の傳を中心として、近年稀な大漁があつた「印度佛教史上に於ける龍樹の位置」(松本文三郎、龍谷大學論叢)は、西洋哲學史上に於けるカントのそれの如く、甚だ重要なものであると說かれ、八宗の祖といはれるだけに、「眞言密教上より見たる龍樹菩薩」(松永有見、同誌)、「龍樹菩薩と淨土教」(杉紫朗、同誌)「法華經史上に於ける龍樹」(本田義英、宗教研究)など幾多の方面からも研究される。かゝる重要なる位置にある龍樹も、その傳に至つては今尙暗雲に蔽はれてゐるものがある。一たび「新龍樹傳の研究」(寺本婉雅、密宗研究)が發表されて、新古龍樹二人說が唱へられると、手嚴しい反對論が湧きかへつた。「二人龍樹說の誤謬」(羽溪了諦、中外日報)、「龍樹の傳及び著書」(同人、龍谷大學論叢)、「新龍樹傳の正體」(栂尾祥雲、中外日報及び六大新報)は共に主として西藏側史料の取拔ひから、「新龍樹傳の研究を讀む」(森田龍僧、六大新報)は、支那側史料を重にして、「龍樹の梵名に就て」(荻原雲來、中外日報)は、言語學上の見地から、いづれも新龍樹傳に反對した。「所謂新龍樹問題」(八葉山

房、高野山學報)の論戰は、まだ終結を見ない裡に、昨年は暮れた。佛教の支那渡來は「佛滅年代論」(宇井伯壽 現代佛教)と共に、諸說紛々たるものがある。されど今や漢明求法を排するのには異論がない。「白馬寺の建立に就いて」(藤田豐八、史學雜誌)、何故これを漢の明帝の時にかけたか、それは唐の段成式の酉陽雜俎に魏明帝の時成るとあるを取違へたものであらう。「佛教東流に就いて」(白鳥庫吉 同誌)三國志所引魏略の漢哀帝元壽元年說は、傳說として否認されるも、若しこの頃に傳はつたとすれば罽賓國からであらう。「再び佛教の東流に就いて」(高桑駒吉、同誌)は、佛典上から研究の餘地あるを說いて、現在四十二章經の序文に見える記事を、その最初のものでなく、南北朝初期のものと見做してゐる。かの「金人に就いて」(津田左右吉、同誌)は、Magic に用ゐたものであらうといふに對し、漠然銅像と考へてよからうと、「再び金人に就いて」(原田淑人、同誌)述べたものがある。いづれも意見の片鱗ではあるが。また以て全魚を想察するに資するであらう。支那佛教史上確實なる譯經者中の最初の一人として、支婁迦讖と共に重要なる位置を占むる「安世高の譯經に就いて」(大谷勝眞、東洋學報)は、その譯經の如何なるものなりしかを論述し、その結果として經錄の研究整理が、今後支那譯經史上、殊に佛教史研究上、是非とも行はれねばならぬことを提唱したものである「六朝時代の譯經家」(梅澤和軒、中央史壇)を述べたもの、外に、法蓮華經と龍樹教學とを漢譯して天台宗史上特筆さるべき羅什と約一世紀を隔てゝ出世し、在俗の生活をして天台の血脈を相承した傳大士とを取扱つたものに「支那佛教史上に於ける羅什三藏と傳大士」(二宮守人、禪宗)とがある。六朝末唐初に生起した蓮社及び十八賢などの、傳說の上に成つた高賢傳の原形は、その後幾多の修正增補を經て、現行本の如き杜撰なものになつたのでなからうかと、「蓮社高賢傳に對する疑義」(佐々木功成、龍谷大學論叢)を抱いて、頗るその價値を疑つたものがある。「大乘非佛說の歷史」(妻木直良、禪宗)の中には、支那に於けるその歷史もある。儒佛關係に就いては、唐の韓愈の排佛論を基調として、あらゆる方面から排佛を說いた「宋儒の佛教排

斥論に就いて」(三教學人、佛教學)述べたものがある。宋儒の排佛論に對して明代には、「心泰の佛法金湯編」と居隆の佛法金湯錄」(久保田量遠、同誌)とがある。儒佛葛藤史上、後者の注意すべきものなるを指摘してゐる。尙此方面では「支那初期の儒佛關係に就て」(瀨川午朗、第一義)がある。耶蘇教史に關するもので、「景教碑と切支丹墓碑」(濱田耕作、宗教と思想)は、一は支那最古のものであり、他は日本最古のものである。その初め景教碑文の歐洲に喧傳せられるや、眞僞の說が出たけれども、その內容を研究すれば、決して明代耶蘇教徒の僞造物でなく、今や「大秦景教流行中國碑の眞僞」(高桑駒吉、日本教育)は問題でなくなつた。支那學者の景教碑關係の論著の中で、出色の評ある「或る支那學者の景教考に就いて」(神田喜一郎、歷史と地理)、單に錢氏のそれとある錢氏を、これまで錢大昕と速斷されてゐたが、更に考證の進められた結果、それは錢謙益に違ひないことが明かにされた。新しい時代では「一七九三年現在カトリック教支那傳導狀況」(支那)の紹介がある。回教史關係のものでは、先づその思想の方面を見るに、「回教思想の特色」(赤松智城、哲學研究)がある。魔術的要素に富む波斯及びセム思想と、哲學的要素の豊かな希臘思想とを結合し、これを回教化して發展させたところにその特色の宿つてゐることが說かれてゐる。これが形にあらはれた「回教法制の淵源に就て」(飯田忠純、佛教學)は特にその直接淵源としての經典と傳統とを論じたものである。かうした回教及びその現勢を說いて、「回教徒の覺醒するまで」(河瀨蘇化、宗教と思想)を明かにしたものがある「ハルピンに於けるトルコ民族」(大久保幸次、東洋)、「極東に動くトルコ民族」(同人、日本及日本人)また回教徒として省みるべきであらう。思想史關係の方面では、儒教の思想に就いて「儒教觀解」(安岡正篤、東洋思想研究)がある。これに對して「老莊思想論」(同上)も說かれてある。老子の思想には汎神論的色彩が強く、宗教的と理智的とが相混じてゐる所に、其厭世思想が胚胎してゐるとて、「老子の根本思想に就て」(松永材、哲學雜誌)述べたものがある。道家の說から流れ出た所の「神僊思想に關する二三の考察」(津田左右吉、滿鮮地理歷史研究

報告)は、大なる收獲の一であらう。五行思想の影響に關しては、「秦漢の受命と五行說」(箭内亘、史學雜誌)などがある。「支那現代思潮」(松井等、東洋講座)と共に、「支那最近の孔敎に就て」(淸水安三、新人)は、舊來の孔敎中心の思想眞髓が、支那民衆から時代遲れに扱はるべき日の刻々に來れるを示し陳獨秀を先驅として動いた「支那思想革命」(同上)は、その根本精神よりその反響などに說き及んでゐる。「世界史及び日本史に現はれたるスツルム・ウンド・ドラング時代」(高須芳次郎、中央公論)の中には、支那の春秋戰國時代が、スツルム運動のあつた時で、最近では支那革命の思想的背景が、その特相を具へてゐると述べてゐる。美術史方面の繪畫では、「燉煌千佛洞出尼波羅式佛畫に就て」(瀧節庵、國華)「燉煌千佛洞に於ける北魏式壁畫」(松本榮一、同誌)などがある。「宋代畫論畫史の書」(瀧精一、同誌)は、疑はしきものを除いてしまへば、約十二種は現存するといふ。東西關係を取扱つたものには、「支那人畫家の西洋風俗畫揮毫の濫觴に就いて」(那波利貞、歷史と地理)、これをば唐末五代頃に觀做して居るが

あり、「東西の美術を論じて宋元の寫生畫に及ぶ」(岸田劉生、改造)ものもある。彫刻では「支那六朝の佛像と土隅」(濱田耕作、國華)との關係を論じた力篇がある。書に關しては、「唐代の書學」(羽澤畔人、書勢)があり更にこれに關聯しては、「支那硯石の研究」(後藤朝太郎、國華)、「硯談」(小野鐘山、書勢)などもある。瓦磚を始めその他の「支那ノ建築材料ニ就テ」(西山榮久、東亞經濟研究)、名稱、起源、用途、種類などを調査したものもある。その他尙文化史關係のものを擧げると、漢字に就ては「文字の創始」(樋口銅牛、書勢)があり、字音に關しては、「漢字音の研究」(中村久四郎、史學雜誌)がある。後者には邪靡堆と邪摩推とが共にヤマトの音譯なる事、其他四項が詳說されてある。又印刷では、「支那に於ける印刷の起原に就いて」(市村瓚次郎、同誌)考證の一端を示されたる者、及「宋時代刻書印刷」(中村久四郎、斯文)がある。音樂の方面では、「樂律溯源」(靑木正兒、支那學)に於いて、支那の樂律は、西周から春秋頃まで五律であつたのが、戰國の頃から十二律に增加したものであらうと述べてゐる。演劇の側では、「支

「那劇の盛衰と其技術の變遷」(梅蘭芳 改造)がある。「指南車と指南針とに就いて」(山下寅次、廣島高師地歴學會々誌)は、これら兩者の何等關係のないことを斷じ、關係ありと認める誤謬說の由來を摘發してゐる。「指南車考補遺」(橋本增吉、東洋學報)は、ジャイルスの Adversaria Sinica によつて、「指南車考」を補正したものである。又「淮南子に見えたる金目に就いて」(那波利貞、支那學)は、これを眼鏡と解する姚範の說の不穩當なるを指摘し、このため支那に於ける眼鏡の歴史並びにレンズ使用の問題に論及してゐる。また「支那の瓷器」(速水一孔、大東文化)に就いて述べたものもある。歴史地理に關するものでは「戰場としての支那の地勢に就いて」(小川琢治、地球)、「北岳恒山と北岳廟」(井上以智爲、歴史と地理)などがある。紀行としては「支那印象記」(武藤長平、同誌)、「袞豫紀行」(岡崎文夫、同誌)、「金陵官書局と南京夫子廟」(那波利貞、同誌)「南京貢院」(同上)、「滬寧鐵道」(同上)、「上海と上海縣」(同上)、「蘇州探古行」(同上)などその目立つたものであらう。支那を中心として漁つて來た私共は、更に眼界を廣めてその環周部に及ぶであらう。先づ北方に視線を投げる「歴史上の蒙古人」(箭内亘、法學新報)は、支那の歴史を以て南北兩勢力對立の歴史と解し、その北方の主要勢力たる蒙古人と滿洲人とを歴史上から眺めて、後者が南方の支那文化に同化し了つたに反し、前者は殆んど北方の遊牧生活を忘れないところに、要は實力の有無から、兩者の間に著しき差異あるを指摘した講演である。蒙古をして史上の一大勢力とならしめた「成吉思汗は源義經也」(小谷部全一郎)との俗說はさて措き、「蒙古の高麗征伐」(池内宏 滿鮮地理歴史研究報告)は、「金末の滿洲」(同上)と共に一大力作である。「蒙古に於ける喇嘛教信仰の起源」(矢野仁一、歴史と地理)は、同地方に於ける族界限定の成立と共に、蒙古の歴史を、從つて支那のそれを、一變せしめたる重大な史上の事件である。その起源が何時であつたか、紅教派の喇嘛教はこれを詳かにすることはできないが、黃教派のそれは、十六世紀の後半からである。これが如何にして行はれるに至つたか、その次第に就いて詳密な研究がこの一編である。また「漢人の蒙地開發に

ついて」(同人、史林)は、それが何時頃から始まつたか、容易に決せられないけれど、先づ山西邊外歸化城一帶の屯墾などから、次第に招墾によつて內蒙古より外蒙古に及んだことは確かである　蒙古の札薩克や王公臺吉はこれを望んだが、旗下の蒙民はこれを喜ばず、結局前者等もその弊を受けねばならぬことになるので、清朝が蒙古の生計たる牧畜に妨げあるを理由としてこれを禁じたのは尤もな次第であると論じてゐる。「支那ノ邊外移民運動」(長野朗、東亞經濟研究)は、最近益々盛んになつた「明朝の重大な外患であつた北虜自身の內情やその勃興に就いて、明人の記錄として重要な「北虜紀略・譯語及び山中聞見錄の著者」(和田清、東洋學報)を考證したものがある。紀略の著者は趙時春であり、譯語のそれは蘇志皐であり、最後の聞見錄は恐らく平寇志の前編として李確の手に成つたものであらうと推斷される。若し夫れ「周代の戎狄に就いて」(白鳥庫吉、同誌)はこれが今日の何人種に屬するかその解決に一歩を進めむとて、崔東壁の說を斥け、これを異族の汎稱と解し、戰國末より漢代になると、陰陽五行說の影響を受けてそれが特稱となつたもので、西戎は大體に於いて西藏種であり、北狄は概ね蒙古種であると說き、尙 Tungusse 種の貊の外に、Turc 種と思はれる玁狁又は獫狁があつた。最後の兩者は同一民族の二稱であつて、西藏種に屬すと考へられる昆夷とは別種であり、またかの蒙古種を骨子とし、それに Tungusse 種を附け加へた雜種であると見られる匈奴とも異種であると論ぜられてゐる。貊種族に就いては、「滿洲最古の文化民族」(八木奘三郎、滿鐵調査時報)がある。次に西方に關するものを見ると、「粟特國考」(同上)の一大雄篇がある。露領トルキスタンに古くから鳴り響いた Sughda の名が、獨り支那に聞えなかつたことはあるまいとて、後漢書西域傳の粟(粟)戈國こそ卽ちこの Sogdiana なれと斷じ、漢代に於けるその彊域を、殆ど唐代の粟特國卽ち六姓昭武のそれと見て差支ないと結んでゐる。尙「西域研究」(藤田豊八、史學雜誌)として、(一)漢代の扞泥城の伊循(脩)城との位置に關し、水經注と唐代文獻との所傳の間に、東西正に相反したるものゝあるのは、後者の誤解に基くこと、循と脩とは孰れを以

て僞誤となすべきか不明であること、(二)漢代の扞彌はDandan-ulikに比定されること(三)干闐の樹枝河は樹拔河の誤で、こは首拔河と同じく、Sanskrit の Sphatika〔佛家七寶の第四〕の對音であらうと思はれること、及び達利河もVai durya〔同上第五〕の略譯であらうと以爲はれることを考證してゐる。また西域の天の神を示すために、支那では初唐の頃から祆の字を用ゐ出し、これを天Tien の方音Xienとも呼ぶに至つた。かの匈奴語として傳へられる祁連も赫連なども共に、この語を寫さうとしたものであらう。それには兩樣の說明があつて、今やその岐路に立つてゐると述べたものに「天と祆と祁連と」羽田亨、史林)がある。現在の支那史學者中尤も注意に價する「陳垣氏の元西域人華化考を讀む」(桑原隲藏、同誌)の際心付かれたる五點卽ち陳垣氏が安世通の安世を安息の異譯と認め、これを姓と解し通を名と見るのは間違であつて、安は安國出身を表はす姓で、通世が名であるといふ考證以下四項を擧げて該著者並びに一般の參考に供せられたものがある。「英國博物館所藏スタイン寫眞帖」(矢吹慶輝)も、この方面の資料として擧げねばなるまい。次に南方の方面に移ると、先づ思ひ浮ぶのは「象」(藤田豐八、史林)である。恐らくこの名は南方から漢族が承けたもので、これに關する幾多の古傳說は、いづれも南方に關係がある上に、老莊の思想が著しく印度思想に類似して居り、孟子の轉附朝儛がJambu-dripaであらうと推定されることなどから、支那へは佛敎渡來以前、古くから直間接に印度文化が波及してゐたであらうと想像される。印度文化圈內にある「カンボヂアの宗敎」(植木謙英、宗敎研究)は、ヘスチングスの宗敎倫理辭典の同項を抄譯したものである「南方民族と古銅鼓の史的關係」(森丑之助、臺灣時報)も何等かの暗示を提供するであらう。唐代の「南海寄歸內法傳奈良朝書寫斷簡」(熊谷直之)は、資料としても尊ばるべき者であらう「支那人入國問題ト華僑ノ世界的發展」(澤村幸夫、東亞經濟研究)と「我が觀た南洋」(神田正雄、憲政)とには、この方面に於ける支那人の發展を示してゐる。我が邦人の發展した跡は、「邏羅の日本町」(新村出、史林)が語つてゐる「澳門に於ける日本人排斥の史實」(支那)も、亦この一面

を告げるものでなからうか。實際上のみならず學界に於いても久しく閑却されてゐた邊外の小土に就いて、その眞相の究明を試みようとしたものに、「琉球臺灣の名稱に就いて」（和田清、東洋學報）がある。隋書初見の流求が今日の臺灣であり、我が南島を琉球と呼ぶに至つたのは明初以來のことで、臺灣が正しく全島の治所となり、更に全島の總稱となつたのは、清が鄭氏を滅してからのことである。これをばSchlegelとは獨立に、更に綿密に考證したものがこれである。「南海蠻夷小論」（移川子之藏、史學）は、「印度支那の諸種族」（高橋惇、臺灣時報）と共に、この方面の住民を知る助とならう。更に廣く清國及びその附近の民族を知る太切な資料は、「人種學上より見たる皇清職貢圖」（鳥居龍藏、人類學雜誌）に示されてゐる。〔杉本〕

西洋史　昨年の史學界を見渡すに西洋史の方面は甚寂寞の感に堪へぬ、近來流行をなした泰西名著の叢書的刊行も行はれず著書譯書も極めて少ない、「西洋美術史要」（板垣鷹穗著）は西洋美術史を系統的に理解せしめる爲の入門書とあつて第一部は建築彫刻繪畫により其時代々々の主要なる潮流の展開する姿を概觀し、第二部は美術史概說教材として希臘時代、羅馬時代、中世時代、ルネッサンス時代、宮廷文化時代、國民文化時代に分ち各作家の作風、作品を詳述し更に附圖として各時代の特徴を示す、代表的作品を掲げて居る。尙各時代の作品を指示するものとして、「西洋文化史講義資料」大野法瑞編）がある。「世界文明の統一」（丸山岩吉譯）は Marvin の Western Races and World を飜譯したもので西洋民族と比較的進歩せざる民族との世界的關係を考察し、如何なる基礎によつて友愛的關係を保ち共榮的に提携し得るかを論じ、「日米國際記要」（大日本文明協會編）は過去半世紀に亙つて米國に於ける日本移民の勞働狀態、日本政府の移民政策、日本人の歸化に關する係爭、排日的氣運の勃興、遂に最近移民法の制定にいたる日米交涉の經過を沿革的に述べたもので日米關係の公文を綱羅し、最後に外國人の土地所有に關する各國の現行法を列擧して居る。「法律進化論」（穗積陳重著）第一部法原論の上卷、原形論の前編後編として二册出版されたが、著者が深邃該博な蘊蓄を傾倒し和漢洋に

互つて法的現象の時間的權移の原理を說破したもので稀有の名著と信ずる、特に吾人の注目を牽くのは法文體の變遷に關する所論で法律の文章用語の變遷する原理を本邦及英國の例に依て說明し、更に獨逸に於ける十九世紀の國語運動と法文體の變化に論及し、之を以て一異例と斷じた點にある、雜誌の論文で古代に關するものには「埃及第十八王朝の宗敎」(恒松安夫、史學)は王朝前の埃及人の來世觀より說き起し世界を照す太陽が全世界を領する埃及を支配するといふ觀念より太陽神アモンラーの崇拜を生じ、靈魂不滅論に基き木乃伊の術の發展を來し、王朝の末期にいたりイクナント王のレフオルメーションの成功せる事由を叙べ、「希臘思想の推移と神像の變遷」(板垣鷹穗、改造)は先フイデアスのアテネ女神とスコパスのマウソロス陵墓とを比較し、前者は道義的理想的表現の時代、後者は人間的情緒的表現の時代とし夢見る如き穩かさを表はして居るプラキシテレスを經てアレクサンデル大王時代のロードス・ペルガモン系の作品降つてヘルマフロヂチになると希臘文化の墮落を示し、希臘が羅馬の州になるや彫刻家は個性なき技術の工人に墮したことを說いて居る。「希臘に於ける自然法の觀念」(船田享二法學協會雜誌)は希臘の哲學者の自然法觀を叙述し、其の完成したアリストテレスの說を詳述し彼にあつては自然法卽道德律なることを述べ次にプラトーもアリストテレスも自然法を國家の制約の下に說く、これ長所でありまた短所であつてこの點から考へるとストア哲學の世界主義的見解は一歩を進めたものであると結論してる。「落栗」(坂口昂、藝文)は筆者曾遊の地アルバ山中、殊にシセロの山莊遺跡ツスクルムの追懷感想を叙べたものでシセロの出身、閥閲、さては政治家として學者としての生涯、面目、老來隱栖當時の旦暮、または晩年掉尾の活躍時代並に彼をとりまく政客學徒との交遊などを興味ある筆致で記されて居る。中世關係では「ツールのグレゴリイのフランク史に就いて」(飯田忠純、歷史と地理)は六世紀に於ける唯一の歷史家といはれるグレゴリイの主著フランク史の解題であつて「佛國法制史上の貴族」(落合太郎、法學論叢)はフランク建國當初の國情、騎士階級の發成、其の特

權の法的承認、世襲化、封建制度の成立を論じ、封建制度を概觀して其特徴・沿革、貴族たる地位の得喪を述べ、更に貴族の實質的存立を危殆ならしめたのは長子權の不確實なるに基くとし英國の制度と比較論究して居る「ドイツ宗教武士團」竹林熊彦　歴史と地理）はドイツ武士團が異教徒野蠻民を征服し、プロシアの地に傳統の煩累、封建制度の拘束を受けず、理想的國家生活を營み一時極盛を樂んだがタンネンブルグ戰に敗績して以來、ポーランドの鼻息を窺ふに到つたことを叙べ「回教思想の特色」（赤松智城、研學研究）は回教に於ては教祖以來思想上著しき變化なくまた、其の本來の思想には教會制度の組織も形成上正統說を定める教職及會議もないから寛容であるとし終りにスペングラーの「アラビア文化」を魔術的文化と論斷したに對し、其の當らざる理由を論じ。「社會契約論の起原と封建時代」（槇智雄、史學）はホッブス、ロック、ルソーの社會契約論を比較し、尙其の起原に溯つてフーカーの契約論を批評し皇帝卽位の際の人民の歡呼、法王の選叙に於ける宗教會議の決議等もある社會の同意を必要とし一種の社會契約なりと論じ其の起原は古代希臘に見るを得るが中世の制限的政治權力卽治者の絕對權を認めざる制度及思想に發すると見るが穩當だと決論して居る。中世末期のものには「ダンテのさまよひ」（大類伸、史學）がある、詩人にして實際家たるダンテの活動と瞑想に對する觀念を主として彼の帝政論及神曲の二作により考察したものである。近世の初期に關するものには「エラスムスと教會改革」（安藤俊雄、歴史と地理）理性的神學者一個の學徒として終始したエラスムスが教會改革に對して如何なる態度をとつたかを彼の書簡によつて窺はんとした研究で不偏不黨公平を持した彼の苦衷を叙し、「羅馬の殉教畫」（大類伸、同誌）は筆者曾遊時の印象により倫敦はネルソン、巴里はジャンダークに代表さるゝ如く羅馬は反動宗教改革の產んだ醜い實感的な殉教畫に代表されるとし、復興期の作品と宗教に關する激昂の熾烈だつた十七、八世紀の羅馬の畫風とを比較論述したものである。「模範國會の要素と其の組織」（古部百太郎、史學）は英國の貴族制度の沿革を述べ、都市の代表者の概念を明にし、

貴族院と庶民院の分立するにいたつた事由を說き、當時の英國の議會の組織を詳論したもので、「英國の衆議院」（伊藤龜雄、外交時報）は前年より引き續き英國議會に關する種々の事件制度逸聞を記して居る。「陪審制度の起原沿革に就いて」（南舟生、國學院雜誌）はこの制度の起原は遠く希臘羅馬にあるが現今の裁判制度に寄與することの多いのは北方ゲルマニの制度であるとし、更に現在歐洲諸國の制度の沿革を述べ次に東洋諸國にも古代より同樣の思想のあつたことを周禮、孟子、憲法十七條、家康の御定書百ケ條等に就て論述して居る。「フレデリック二世の政治學說」（中村善太郎、史林）は主として大王の二大著、「マキアベリ駁論」「政府の形態及君主の義務に關する說」によつて其の政治學說を論述したものであるが前者については尙、青年公子の理想論に留まりマキアベリの所論が當時の伊太利に適切なる君主であつて、概念的一般的君主論にあらざることを看破せず、後者に於ても大王は自然權平等、社會契約說等を唱へてゐるが四圍の事情の爲めに自ら立て立憲君主制の範を垂るゝことが出來なかつた、要するに大王は從來の專制政治と妥協し、所謂啓蒙化せる專制政治の政治思想を闡明するに畢つたと結論して居る。「アダム・スミスの根本思想概觀」（竹內謙二、國家學會雜誌）はスミスの全研究體系、世界觀と研究方法、其根本思想等を論述し特に彼の主著たる道德情操論と國富論との內部的關係を考察し、彼が如何なる思想を有したかまた其の由て來る所以を上揭の二書で論究したものである、尙經濟論叢は一月アダム・スミス記念號を出してゐがこゝには其のうちの二三題目を指摘しておくに止める、「道德的價値判斷に關するスミスの思想」（恒藤恭）「國富論の研究方法に就きて」（財部靜治）「スミスの自然主義觀と自由政策の見地」（河田嗣郎）「スミスの自由放任論の特徵」（堀經夫）「スミスの自由貿易觀」（作田莊一）「スミスと浪漫派經濟學」（山口正太郎）等。「米國史概觀」（高木八尺、國家學會雜誌）は英國人の移住時代から南北戰爭まで「米國近世史に於ける政治の新傾向」（同人、同誌）は現代までを概觀し建國以來米國人の頭を惱まして居るのは政府の權力の增大に對する危惧の念であつて三權分立の制、及

Checks and Balances の主義が米國憲法の最大特徴であると說き國際聯盟の否認も其の結果であると附言して居る。「一子相續制に就いて」(八木芳之助、經濟論叢)は該制度の本質を說き更に其の得失を論究したものであり。最近世史に關するものとしては「歷史の進化に於ける國際聯盟」(神川彥松、國家學會雜誌)國家相互間の關係並に其の平和協調を保つ爲の努力を歷史的に究察し、ヴエルサイユ會議後の國際聯盟に對する反對論懷疑說を擧げ更に著者の希望を述べ「ヴァージン島の買收と米國」(庄司萬太郎、史學雜誌)は同島の軍事的意義を述夙に米國が垂涎しつゝあつたが遂に一九一七米國の所領に歸するまでの經緯を說き、「比島獨立運動の推移」(新井誠夫、外交時報)はリサール、アギナルドの獨立運動以來、同島民は獨立を熱望しウイルソンもこれに同意を與へたるが現在の共和黨政府は尙早を唱へ、其の理由として第三國(日本)の侵略をほのめかしてゐることを述べて居る。「レーニンの死」(齋藤淸太郎、同誌)は近世史家は個人の力を輕視する傾向あるが露國革命政府の成功はレーニン個人の力によるこころ少からずとして中心點を失へる露國の政界が如何なる道程を進むかと懸念し、「露西亞革命史」(岡田忠一、東洋)は十九世紀初年の十二月黨の蹶起より現代までのロシア最近世史論である。尙、宗敎と社會主義との關係」(財部靜治經濟論叢)はマルクス派の社會主義及其の學說を奉ずる社會民主黨は無神論の見地に立脚するものではないと說き、社會主義の宗敎に對する態度を說明し其の誤解から生じた論爭及騷擾を叙述して居る。〔菅原〕

考古學界

昨年の考古學界の業蹟を顧みると遺物遺跡から歸納する吾が古代文化の究明に資する新事實が少くはなかつた。殊に朝鮮半島の古墳の學術的發堀の調査は極東の考古學界を促進せしめるものと云へる。扨て過古數年間に於ける華々しき內地の石器時代人骨の發見は其の數既に一千例に及び、其の約半數は京都帝國大學の淸野謙次博士の蒐集にかゝるものであるが(考古漫錄、歷史地理)博士は昨夏更らに樺太に渡り、古人骨研究の對象となるべき現代アイヌの純粹なる骨骼を得んが爲に多大の努力を拂ひ、鈴谷貝塚にて九體の石器時代人骨を、東海

岸の魯禮に於て約五十體の金屬期時代の人骨を採集し、「樺太アイノに關する人類學的探究紀行」(同人、地球)に其の概況を報じ樺太アイノ埋葬法に新智見を齎らしたのを此の方面に於ける最も重大なる事項と言へたう。やがて此等の基本的調査の結果は蓋し吾が人種問題を解決すべき鍵となるべきものであらう。其他各地に於ける人骨の發見は漸く下火となり僅に陸奥北津輕郡相内村、下總加曾利貝塚(八幡一郎、人類學雜誌)等に數例を見るに止まつてゐる。斯くて古代人骨は漸く基本調査の對象となり從つて古代人骨に立脚する綜合的記述に現れるものが多く「現代日本人の骨骼の研究」(宮本博人、同誌)日本石器時代人骨の研究概要「(小金井良精)「日本石器時代民族とアイヌとの關係」(鳥居龍藏、以上土中の日本)或は「石器時代人に外聽道骨瘤の見らるゝこと」(長谷部言人、人類學雜誌)等あり。なほ之に聯關するものとして「日本石器時代家犬に就て」(同人、同誌)等は其の主要なるものと見るべきであらう。されど石器時代遺跡遺物そのものゝ調査は年々その精織を加へ先史考古學の立場としては進境せるものを認められる。特に該遺跡遺物の稀薄である近畿地方に究明さるゝことは一層興趣をそゝるものがある。「京都市北白川町發見の石器時代遺蹟」(京都府史蹟調査報告第五冊及島田貞彦、考古學雜誌)は山城國唯一の繩紋土器併存を傳へ最近更らに石棒類の發見さへ見た。同府下發見の新例として「丹後に於ける二三の史前遺跡」(同上、報告)は注意される。函石濱の著名な遺蹟以外に新たに何鹿郡、與謝郡、峯山町から發見された彌生式時代遺蹟を叙し、其のあるものは時代の下りて一部分原史時代に入れるものあるを想定せしめてゐる。大和に於ては大和川を中心として擴がつてゐる「大和に於ける史前の遺跡」(森本六爾、考古學雜誌)に約九十箇所を擧げ就中、高市郡新澤村一、磯城郡川東村唐古池は彌生式遺跡として著名なものとせられ、前者には鹿の素描ある「原始的繪畫を有する彌生式土器」(同人、同誌)の發見があり、且つ其の發見遺物を蒐錄した「大和新澤石器時代遺物圖集」の出版さへある。後者は近時しば〳〵斯學者によつて發掘せられ興味ある資料を提供してゐる。其他同國宇陀郡三本

松村の遺跡」(猪狩忠英、考古學雜誌)は國府式繩紋土器を有することに於て、同國吉野郡大淀町の遺跡と共に注意すべきものである。轉じて近江國の「伊吹山下の石器」(中川泉三、同誌)は伊吹、春照兩村の發見のものであるが其遺物には有數なものを含み而かも繩紋土器を共存することに於ては「琵琶湖底より土石器の發見」(柴田常恵、人類學雜誌)「琵琶湖底から發見された有史以前の遺物」(島田貞彦、歴史と地理)中に云へる東淺井郡尾上湖底發見の繩紋土器と共に近江國にも該遺跡の存在する確證を與へたものと云へる。關東及東北地方では「東京市及其附近に於ける石器時代遺物新發見地名表」(大里雄吉、歴史地理)によつて其補遺をなし東京大學人類學教室の倉庫跡から發見された二個の石器(中谷治宇二郎、人類學雜誌)は彌生式遺跡の發見として興味あり、「武藏橘樹郡生見尾貝塚」(甲野勇、同誌)同國同郡城郷村にて玦樣耳飾の發見(谷川磐雄、考古學雜誌)磐城國新地村小川貝塚の發掘(山内清男、人類學雜誌)羽後國田利郡本荘町附近の遺跡(松田、阿部、同誌)等見るべく、中央部にては「諸磯式土器の研究」(谷川磐雄)として繩紋土器の分類に更らに所謂「諸磯式」なる一派を提唱したものである。中國にては僅に備前兒島郡磯の森貝塚」(島田貞彦、考古學雜誌)を叙し特に該地發見の爪形紋土器に就て詳述するものあるに止まつてゐる。九州方面としては、筑前鞍手郡古月の貝塚」(下浦臻、同誌)筑前筑紫郡日佐村井尻の彌生式遺跡」(中山平次郎、同誌)「筑前糸島郡今山に於ける石斧製造所址(同人、同誌)「肥前雪ノ浦遺蹟調査報告」(八重津輝勝、同誌)等を擧げられる。中山博士が石斧製造所址では金石並用時代に於ける分業發達考察の一資料として石斧製作に新に敲打の順序を加へたのは一知見とせられる。雪の浦遺跡には同地方獨特の石鍋の多數を其の製造所址と共に發見し、石容器製作に一識見を與へた。次に遺物に立脚して考證せるものに「日本石器時代の貝器」(村本信夫、歴史地理)あり、又た「石器時代土器の二三の事實に就て」(同人、考古學雜誌)は化學的に其の資料を取扱ひ、石器時代の遮光器に就て(鳥居龍藏、人類學雜誌)は其の使用せしことを認め、しかも北方西比利亞に行はれた革製式のもので

あろうとし、これに反して「石器時代土偶の所謂遮光器に就て」(長谷川言人、考古學雜誌)各國の土俗と遺物に其の類似を求めて瞼裂を一線に示す手法が必しも遮光器として基くものでないことを述べ「石棒に現れたる割禮の痕跡」(武藤一郎、同誌)は土俗的類例から說略し、「日本有史以前の山岳住民及其生活に就て」(鳥居龍藏、人類學雜誌)從來の遺物遺跡研究が平地に偏し山岳地帶を顧みるものゝないことを云ひ平面的に對し一方垂直的の當代文化を考察する必要を力說し兩者の文化には異なる發達あるものとして勢ひ其の製作遺物にも自から識別せらるべき何物かゝあるとし、卽ち繩紋式土器に厚手、薄手の二派を生める見解を提供してゐる。當代の府縣別的の調査報告は前年來進興せる各地の史蹟調査に待つものが頗る多い。畿內地方では前出の京都府下は旣に其の第五冊を告げ山陰、北陸地方には旣に福井、石川、鳥取の諸縣下のものゝ調査せらるゝあつて所謂、日本海方面の特種な古代文化が究明せられてゐる。昨年度に於ては岩手縣下の「チャシ」に關するもの其他數例を見るものであるが、就中、此種報告書中に於て特筆せらるべきものは「諏訪史」第一卷と「下伊那の先史及原史時代(圖版)」(鳥居龍藏)とを推さねばならぬ。前者は彼の諏訪湖底發見の當代遺物を中心とする鳥居博士の所謂山岳式考古學に屬する地形であつて博士の最近の所論を包括してゐる。今ま本書の內容を一々紹介することは到底不可能であるがたゞ本邦內に於て一郡誌の爲に斯かる尨大な出版を敢行せしめた同地方人士の好學に敬意を表せざるを得ない。後者も亦た前者に劣らぬ資料を提供する者であつて殊に磨製石鏃の豐富な發見は出色とせらるゝ。其他「原始文樣集」は各輯を通じ當代の遺物を親切に解說する處あつて而かも通俗に流れずよく當代の好尙を一般的に導かしむるものと云へる。其他見落すことの出來ないものに「土中の日本」(大野雲外)がある。多年斯學に從事せる間に發表せし諸論文を蒐集したものであつて斯界に於ける氏の功勞の一班を如實に窺ふことが出來る。以上は昨年度の內地に發生した主要な先史考古學に關する諸報告であるが過古半世紀の斯界を顧みると(有坂鉛藏、土中の日本)轉た今昔の感に堪

へぬものがあるであらう。更らに眼を所謂金石並用時代に轉ずると舊臘三河國寶飯郡小坂井村伊奈にて三個の大形式銅鐸の偶然的發見があり、該地方の銅鐸出土に益々濃厚を加へたものである。銅鐸の研究と相待つて「銅劍銅鉾に就て」(梅原末治、史林)は前年に引續き斯學者の注目する論文であつたが更らに磨石劍との關係を述べ、或は伴出の玉器等からしてその製作者の或者は少くとも日本人なることを告げ、最後に數例の分析によつて含錫量の多いものは支那の舶載品による等一見解を與へて居る。銅鐸、銅劍銅鉾等と密接な關係あるべき所謂甕棺に就いて(後藤守一、考古學雜誌)の續稿あり大和中尾發見「異形の陶棺を發見したる大和生駒郡伏見村實來字中尾の遺跡に就て」(森本六爾、同誌)の陶棺は一横穴に四例あるもの「近江栗太郡安養寺發見の筒形土器」(島田貞彦、同誌)「出雲能義郡矢田發見甕棺調査報告」(倉光清六、歴史と地理)因幡岩美郡米里村のもの(梅原末治、因伯二國に於ける古墳調査報告)等は古墳時代に互つての甕棺陶棺研究に有力な資料を與へてゐる。銅鐸そのものゝ調査報告には「伯

耆東伯郡八橋町發見の銅鐸」(同人、同前)あり、「銅鐸に描かれたる家形と人物圖樣」(島田貞彦、考古學雜誌)は三角形式人物描寫は所謂原始描法であつて必しも本邦古代風俗を表現してゐるものでないとしてゐる　次に古墳關係を見ると日本考古學研究の基本をなす範圍であるだけ主要な報告に滿たされてゐる。神戸市丸山古墳と發見の遺物(梅原末治、同誌)は丸塚にして圓筒なく粘土槨を包藏して而かも發見するものに漢末三國代の在銘あるものと同一式の神獸鏡と銅鏃の共存あつて近畿築墓の古式をなす特異のものと云へる。こは甲斐國西代郡大塚村の赤烏元年鏡發見の古墳(後藤守一、同誌)とも類似し、後者が本邦最古の紀年鏡たると共に漢鏡研究に寄與するものが多い。「神戸市板宿得能山古墳の調査」(梅原末治、歴史と地理)のもの又た前記の丸山古墳と並稱さるべきもので外形に比し内部構造に見るべきものあつて且つ六朝初期とすべき繪紋樣神獸鏡等の發見がある。同上遺跡調査に森本六爾氏(考古學雜誌)のもある「播磨壇上山の古墳」(梅原末治、人類學雜誌)は重要視すべきもので其の陪塚には

方形墳を有し、而かも圓筒を繞らし且つ石棺内には六朝初期と見る獸帶鏡を藏してゐる。方形墳が從來推古帝前後とするに對して其の上限を與へたものと云へる。「備前西高月村の古墳」「備中都窪郡の二三の墳墓に就いて」(以上同人 歷史と地理)は從來古墳の基本調査の少かつた山陽道方面のものに對し斯學者の詳密に調査したものである。山陰道方面にては前述せる樣に近時この方面の究明に光彩を副へ就中、「因伯二國に於ける古墳の調査」(同人)は曩に出版された「鳥取縣下の有史以前の調査」の姉妹編をなすもので同縣下の遺物遺跡を精細に叙してゐる隣縣の島根縣に於ては既に縣史の第三卷の國造政治時代の出版を見た。内容記述は文獻に重きを置かれてゐるが就中、注目すべきものは出雲玉造の遺跡である。該遺跡は本邦古代の管曲玉等の製作地として其の豐富な遺物を殘存し尙ほ又た土俗的に其の習風を殘してゐることの點等に於て特に研究せらるべき遺跡であらう。河内玉手山發見の楯形埴輪(島田貞彦、考古學雜誌)には直弧紋を附してゐることを述べ其外に、「大和生駒郡押熊出土の骨壺」(森本六爾 同誌)等あり、更らに東北、關東方面には前述の赤烏元年鏡の調査に「甲斐國西八代郡 烏居原の調査」(後藤守一、同誌)あり、尙ほ羽前東村山出羽村の「漆山古墳實査報告」(同人、同誌)ありて木棺には木製曲物及櫛の特種の遺物を見、福島縣下にても竹製櫛の發見を傳へてゐる(小此木忠七郎、人類學雜誌)「陸前名取郡增田村下增田經ノ塚」(長谷部言人、同誌)は該古墳發見の鹿角製刀裝具を詳述し、ここに其の本來の着裝狀態を明にするものであつて更らにこれが石器時代人骨に共存する腰飾に共通する性狀なきかを類推されてゐる。其他又た同所發見の人骨に就て「顏面に赤色附着せる古墳頭骨」(同人、同誌)を論じ死者に赤色を施すはもと縛結、包裹封鎖と同じく防禦を意味し兼て裝飾に供せらるゝものとし、赤色附着の頭骨は改葬等によるよりも顏面等に塗抹した皮膚が消失して骨面に附着したものと認める方が穩當であらうとされてゐる。尙ほ「石棺の封鎖裝置」(同人、同誌)は「原始的住宅」(塚本靖、考古學雜誌)と共に石棺に就ての一考證である。岩手縣に於ける古墳分布の概況(小笠原迷宮

人類學雜誌)「陸中一方井村古墳郡の調査」(梅原末治、歴史と地理)等がある。後者は遺物遺跡から見て營造が既に火葬の行はれた後であるが尚ほ古墳營築の風習の命脈あるものとしてゐる、近時究明せらるゝ東北及關東方面の古墳内容遺物が著しく其の上限を示すの事實に對し又た其の下限を暗示するものとして該地方の古代文化研究は將來囑目せらるべき所であらう。又た「人類學考古學より見たる武藏國立石村」(鳥居龍藏、人類學雜誌)と題し、所謂メンヒルに類するものではないかとせられ、「神奈川縣高座郡海老名村の地下式擴」(中山毎吉氏、歴史地理)は日向、大隅に諸例あるものとの共通を語つてゐる。轉じて九州方面を見ると「豐後速見郡北石垣村の石室古墳」(梅原氏、考古學雜誌)にて其の石室構造が筑肥地方の特色とせられてゐるものが大分灣の沿岸にも存在することを報じ、「福岡縣浮羽郡福富村竹重の一裝飾古墳」(小松眞一、人類學雜誌)は由來同地方の特色とせらるゝ古墳内壁の着彩裝飾の新例であつて主として楯形を描いたもので其の紹介をなし、「筑後に於ける二三の裝飾古墳の新例」(島田貞彦、歴史と地理)と合せ見るべく、後者には椿子村塚鼻古墳奥壁の花形裝飾、三井郡草野町夫婦木古墳の騎馬人物圖樣などの新例を紹介してゐる。又た古代繪畫としては長門豐浦郡彦島に紹介するものがある。弘津史文、考古學雜誌)「二個の原始的箆繪土器と其の類例」、鳥田貞彦歴史と地理)は本邦發見の古代遺物に描かれた人物と動物圖樣を二個の新例を紹介するに際して蒐成圖示したものである。更に古墳遺物を對象として論究するものに「鈴鏡に就いての二三の考察」(梅原末治、同誌)は從來彷製として其の起原發達を可能とせられて居るが氏は最近、南鮮發見の着鈴遺物に立脚して其の萌芽の或は彼地ではないかとの推論をされてゐる。「提瓶に就て」(濱田耕作、中央史壇、土中の日本號)は陶質陶器の特種な此の形態に就て其の起原發達を考察し、遠くギリシヤ或はエジプトに支那に其の論據を詳にされてゐる。古鏡を對象とする研究は紀年鏡の發見或は北鮮其の他の遺跡よりの發見により近年益々推究せられ就中、「支那年號鏡の二三の新資料」(梅原末治、藝文)「年號銘ある支那古鏡の新資料」

（同人、歴史と地理）「北鮮發見の古鏡」（同人、東洋學報）等があつて年號銘あるものには建寧二年（後漢）の獸首鏡、景元四年（魏）の規矩華紋鏡、晉の泰始七年鏡其他吳代のもの十數面であるが中に晉の泰始七年鏡には王氏作の在銘を有することによつて少くとも單に王氏作とするものを以て王莽代のものと解し、古墳出土の鏡の年代を律するの當らざるものを述べ、むしろ漢末魏晉代に比する持論の適切なるを告げてゐる。後者の「北鮮發見の古鏡」は北鮮には内行花紋鏡、細線式規矩鏡等の多くを見、内地發見には大形三角緣神獸鏡の多量を占むる事實について内地の該形式の鑄造年代が主として漢以後にある爲に前代に榮えた樂浪に發見せないものではなからうかとの假定說を賛し、次代に大形神獸鏡の發現を可能としてゐる。古墳時代を經て奈良朝以後の遺物遺跡に關しては平城宮址に於て其の北面門外から更らに基壇の一角其他多數の古瓦發見あつて該址研究に重要な一發見を見た。寺址關係遺物としての「鴟尾に就て」（原田叔人、東洋學報）の詳論あり、「近江栗太郡石居發見の土塔」（島田貞彦、歴史と地理）は優秀な土塔を發見し、加賀、能登に於けるものは「石川縣史蹟名勝調査報告第二輯」（上田三平）として奈良朝以後の遺跡遺物を叙し、「京都府史蹟調査報告第五冊」中には豐國廟、廣隆寺發見古瓦等あり、其他「奥羽地方に於ける作善碑の一種類に就て」（後藤守一、考古學雜誌）「三河に於ける見聞」（同人、同誌）「越後發見」（廣瀨都巽、同誌）「津金寺石塔其他」（天沼俊一、同誌）等に種々の遺物が紹介せられてゐる。西敎關係遺物に關しては前年「京都帝國大學考古學研究報告第七冊」に濱田、新村兩博士の切支丹關係遺物に詳論せらるゝものがあつたが其後更らに京阪地方、或は越前等に重要な新資料の發見を告げ近き將來に第二冊として刊行せらるゝものであらうが「西敎史上の新史料の發見」（濱田耕作、新人）は其の一班を窺ふことが出來る。又た「考古圖集」は内地の各時代の遺物の外、支那方面のものまでも紹介してゐる。これに類するものに「東洋歴史參考圖譜」がある。以上は日本内地に發生した主要な考古學的の叙述であるが其他文獻と遺物によるものとして「耶馬臺國」（橋本增吉、史學）等は尙ほ將來に

引續き論述せらるべき題目であらう。更に朝鮮半島のそれに轉換すると學術的發掘が大々的に行はれ而かも出土の遺物は日支の連鎖關係より斯界を左右するの地位に立つて居る。昨年度に於ける發掘として北鮮には藤田亮策、小泉顯夫氏等の樂浪遺跡の發掘あつて有數な遺物を見、就中、漆器には前漢の在銘すらあるものゝ出土を傳へてゐる　南鮮では慶州路西里の「金冠塚」に接して、梅原末治氏の調査のもとに所謂「金鈴塚」の發掘があつて前者に劣らぬ遺物が發見された。中にも陶質の騎馬人物及舟像（史林）、金冠、谷種腰佩、袴帶等前者と合して「地中の正倉院」（梅原末治、大阪毎日新聞）と稱するも蓋し誇張の言ではなからう。此等二大發堀の調査報告は近き將來に吾が考古學界に提供せらるゝものであらうが昨年度發行の諸報告には「慶尙南北道忠淸南道古蹟調査報告」（藤田、梅原、小泉）あり中には金海梁山の兩貝塚、慶州發見の石器と古墳出土の異形陶質器、其他寺址等を詳述してゐる　次に古蹟調査特別報告第三冊として發行せられた「慶州金冠塚と其遺寶（上冊）」（濱田耕作、梅原末治）は昨年度に於ける考古學界の業績として最も出色とすべきものである。大正十年九月、慶州邑南路西里にて偶然暴露されたこの一古墳の包藏する各種の豐富なる遺物中に何れの一つにも內鮮の古代文化乃至は支那のそれを語らぬものはないが只一面の古鏡をも含まざるの事實はこれ又た將來に殘さるゝ最も主要な題目であらう。發見遺物と遺跡の論述は古墳研究に一時機を劃したものと云へる。曩に出版された同氏の「近江高島郡水尾村古墳」（京都帝國大學考古學研究報告第八冊）と共に古墳研究の一大指針と云へよう。朝鮮の一般古墳に就ては朝鮮古墳（濱田耕作、考古學雜誌）と題し、原始的古墳、漢族殖民の古墳、北鮮其他に於ける支那的影響を示す古墳、南鮮新羅任那地方の古墳、日本古墳と南鮮古墳との關係に就て叙されてゐる。又た「上代遺物より見たる大陸文化」（高橋健自、同誌）は其の相似を主として朝鮮から求めてゐる。「朝鮮の古蹟及遺物」（藤田亮策、朝鮮史講座）は石器時代より筆を起し金石並用時代に說述してゐる。これ亦た朝鮮の古代文化を具體的に敎へんとするものである。其他、「朝鮮民家」（今和次郎、朝鮮

部落調査特別報告第一冊）も亦た土俗的に見る考古資料である。最後に内鮮を離れて支那方面に入らんに「河南省新鄭縣に於ける周代古銅器の發見（小島祐馬、支那學）「河南省新鄭縣新出の古銅器其他に就て」（石田幹之助、東洋學報）あり、支那古代遺物の内地に將來さるゝこと益々其の多きを加へ。漢代遺物、唐代土偶、石佛像類なごに見るべきものが少くはない。「古銀銅面考」（濱田耕作、史林）は其の將來せられた遺物に基いて考證せられたもので別に「唐代女像の一型式」（同人、佛教美術）がある、將來支那考古學の調査研究の驚くべき發展を暗示するものであらう。又た支那遺物を蒐集さるゝ、内地の人々によつて所謂圖錄として紀念出版さるゝものは近年其の數を增した。其一二を擧ぐると「泉屋清賞」「陳氏十二鐘」（住友男爵）の縮冊再刊「梅仙居藏古鏡圖集」（山川七左衞門）「桃華盒古鏡圖錄」（富岡益太郎）等があつて斯學者に有益なる材料を與へてゐる。一方、好古趣味をそゝる展觀等も隨所に開かれ「支那古美術大觀等」（山中商會）は其の支那方面の遺物を提供したものである。極東に於ける古代の日本文化的地位は内地のそれと共に勢ひ四周の人類學、考古學、言語學等の諸方面の側面觀によつて直間接に究明せられねばならぬ。「日本周圍民族の原始宗教」「人類學及人種學上より見たる北東亞細亞」（以上鳥居龍藏）或は「ロシアに於けるシベリアの考古學」（同人、中央史壇）等博士の獨壇場と見るべく、「西方亞細亞の古釉陶」（原田叔人、考古學雜誌）亦た釉陶から見た東西文化の接觸交渉を窺ふことが出來る。又た「文化人類學」（西村眞次）も昨年度に出版されたものとして彼地の古代から說述せる興味あるものと云へる。〔島田〕

地理學界

昨年の吾が國地理學界を綜觀するに當り先づ一事の特記すべきものは夙に出づべくして出でなかつた地理學專問の雜誌「地球」が年初京都帝國大學理學部小川教授を中軸として文學部地理學教室理學部地質學鑛物學教室教官學生同人の協力によりて出で、越えて十月東京高等師範學校地理科の教授を中心とし東京廣島奈良高師關係諸氏の團結によつて「地理教育」の發刊せられた事之れである

今昨年中刊行の著書及び此等雜誌上に發表せられたる論文により昨年地理學界の概觀を試みる。先づ地理學史の方面に於て「地理學者としてのカント」(小牧實繁、地球)はカントの自然地理に關する論文は哲學史上不朽の名著に比すれば勿論其の價値小なりと雖も當時の時代を考へるならば彼は地理學上進歩した考を有して居たと論じたもの「地理學者としての橘南谿」(岡田武松、地理教育)は東西遊記により地理學者としての彼の輪廓を描き彼は近年明にせられた流體力學的の事實を既に百二十年以前に說述し山汐の現象土地の隆起も見落さず氣象に就いて說く所も全く正鵠を得又風土の人心に及ぼす影響を論じハンチングトン一派の地理學者に先じ天候を叙する點も凡手でなく彼の緯度測定は忠敬の測量より十五乃至二十年も以前であつたと論じたもの地理的發見史の方面に於て「北太平洋航路の發見」(藤田元春、歴史と地理)はマゼランが南米を迂回して比律賓に到達したのは東南及東北貿易風を利用したものであると論じ「西班牙の西進と其地理的事情」(同人、同誌)は西班牙人は北太平洋を海流により北緯四十度に上つた爲日本と交渉を生ずるに至つたと述べたもの次に天文地理に關しては「火星と地球」(新城新藏)「衛星及小惑星の自然淘汰」(平山清次)等の諸編を收めたる天文號が科學知識八月號として刊行せられたるを注意すべく、地球の生成に關して「地球の生れるまで」(松山基範、地球)は地球生成の徑路を微遊星が一の局部的中心の周圍に集合して太陽系が始まりそれより分裂によつて地球が生れ地球が固まらぬ間に一部分がわかれて月となつたと論じたもの、次に地震の方面に於ては關東大地震により大衝動を受けたる我國に地震學者必然の產物として「地震」(中村左衛門太郎)「地震講話」(今村明恒)の兩著が口を同じくして著れた事は寧ろ當然であつて前者は地震の原因說として大陸浮動說、地殼均衡說、放射能性物質說を紹介し地球冷縮說を拒け其他餘震、前震の性質、地震の副因、津浪、地震の被害、地震と温泉、地震と井水震波波長、地震の深さ、火山と地震等に就て論じ「地震講話」は其の前半を五節に割き殊に豫知問題震災輕減問題等地震學の諸問題に就ては熱心に强調する所あり後半

は大地震調査日記に割いた者であるが却て此の中に地震學に對する著者の態度主張が現はれて居り前掲の著書と共に見るべきものであり「地震と都市」(小川琢治)は大地震は一つで終らぬ、地殼の内部に不安定狀態の集積した場合には震源の異つたものが尙續發し得るものと考へ日本で大都市の位する平野は何れも山嶽の斷層線によつて截斷せられて生じた處で危險であるが人口の收容上止むを得ぬ、又地盤の構造と强弱により地震に强弱があるが地質の關係から見て大阪が將來發展し行くべき所は洪積層の丘陵地である京都は加茂川高野川の砂礫層からなり北半には餘り軟泥を堆積して居らぬから大阪や東京下町の如き薄弱な地盤ではないが室町一帶を除いては南に行くに從つて惡い、元來古生層山嶽中を南北に亘る二筋の構造線に沿うて陷沒して生じた平地であるから東西兩側の山麓は危險であり又東西に至る構造線も想像されるとなせるもの。報告類で中央氣象臺發行「關東大震災調査報告」(氣象編)は當時氣象の異常天氣の變遷等を詳述したもので地震の誘因を考へなければならぬ地震學者に對し好個の參考資料を供するものである。次に雜誌に著れだる地震關係の論文を見るに「關東地方の地勢及ひ地質構造」(小川琢治、地球)は地震構造線には南北の構造線外に伊豆半島及び湘南の北西地震構造線、關東平野三浦房總兩半島の北西地震構造線が考へられ之れより震源及び震央帶が考へられる卽ち今回の大震に於て地勢上最も重要なるものは相模山脈で第三紀之れに噴出した石英閃綠岩斑糲岩橄欖石等の深成岩は北西甲府諏訪松代に延び震央帶は該深成岩噴出帶の外側に並走し地震と深成岩噴出との關係を暗示するものであるとなせるもの「ジウスよりフムボルトへ地震成因說の新轉向」(同人、同誌)はフムボルトの體驗による火山地震說を初めとしダーヰンライエル一派の廣義の火山作用說はフヲルゲルを經てジュスハイムの水成岩層褶曲作用說に變遷したが此の說が地盤の隆起を否認し地震現象を地表淺處に起るとしたは誤謬で再び廣義の火山作用說に復歸せざるを得ないと論じたもの「深發地震の本性」(同人、同誌)は第三紀古期噴出帶地下約三四十粁の間に伏在する岩漿帶の變動が今回の大地

震となり廣き地域を震動せしめたのであらう最近二十年間觀測計算の結果震源の深さは三十乃至四十粁で井ーヘルト・ガリチン・ワシントン等の計算と吻合するから構造地震斷層地震は地殼の岩漿層に接する深處に起ると考ふべきでカールナウマンの深發地震の名稱を復活すべく深發地震と火山地震とは互に遷移すべきであるから結局はフムボルト派の廣義の火山作用說に復歸すべきであるとなせるもの「相模灣の所謂隆起と陷沒の意義如何」(同人、同誌)は水路部の公表した如き海底凹凸の變化が何故に海底のみに起つたか疑問で若し實際凸凹の變化が起つたにしても之れは水底の上落と洗滌作用とによるもので之を以て從來の構造地震說を支持する一證左と推斷する事は出來ぬと論じたもの「關東大地震の二三の破壞的結果に就いて(本間不二男、地球)は地震による山崩れ、火山と温泉、地下水、地盤の强弱に就て述べたものであるが其の中温泉の變化は火山作用に起因するを以て地下水の變化とは無關係な事實を示して居る火山力の微小な活動は之れを火山大活動の前兆と見る事は出來ぬ地震前一週間よりの井水の激增混濁激減温泉河水の變色は地震と同時に周期二分震幅六尺の大震動が東京にあつた事と併せ考へ之れに類似する何等かの地動が大震に先行したのでないか、地震の破壞作用は地質構造と密接なる關係を有するとなした諸點を注意すべく「丹澤山塊の地質構造概觀」(同人、同誌)は一月十五日强震の震源地丹澤山塊地貌構成の要素は准平原の殘片、岩相の變化に起因する差分浸蝕、斷層に依つて分離されたる山塊の斷片の三項に求める事が出來る。山塊に於ける御坂層と石英閃綠岩とは岩漿の性質上全然切り離す可からざる關係にあり石英閃綠岩は第一回は岩脈又は岩席狀を成して、第二回はコノリス狀をなし同時に粗粒石英閃綠岩及びアプライトの岩席及び岩脈をなして、第三回はボス又はバソリス狀をなして逆入し丹澤山塊を構成したので此考察によつて九月一日、一月十五日大地震の意味を知り得たとなしたもの「地震と鑛山」(井出健六、同誌)は坑內一乃至二千尺の所でも感ずる其の感じ方は周圍の地質採掘場の狀態に應じて不同で

あるこ論じたもの、「相州地方に於ける九月一日及一月十五日の地震に就いて」(上治寅治郎、小出亮、同誌)は實地踏査による震害の狀況は其の地質構造こ一致するこなせるもの「千葉縣安房郡稻都村國府村の斷層」(上治寅治郎、同誌)は實地踏査により該斷層が九月大震による斷層中最大のものであるこ斷じたるもの、「金峯山彙こ熊本地震」(小出亮、同誌)は明治の熊本地震は金峯山直下に存する深發性地震であるこ論じたもの、「大正十二年九月一日の地震に就て」(寺田寅彦、地學雜誌)は九月一日地震現象中地球物理學上の立場から最も重要なものは陸地海底面の垂直變位で驗潮儀記錄の結果の變化は地震に次ぐ短時間内に起つたこ考へる方が妥當で陸地こ此れに隣る深海底では組成物質に著しい相違があり前者は剛性を後者は粘流動性を帶ぶるから陸地の一端が隆起した時其補償作用こして海底の比較的柔かい部分が狹い區域で著しき垂直變化を示したものではないか、陸地の浸蝕、浸蝕物質の海底推積による地殼表面荷重分布の變化は地震誘發の第二次的原因になるが主原因こは見做されぬ、下底岩層の熔融凝固構造變化による比容の變化により之に伴べる地盤の浮力に來す變化の考のみで今回の地震を說明する事は出來ぬ、地球全體收縮の爲に表面地殼に起る横壓力は物理學上認められぬ、ジョリーの說は都合のよいものであるが彼の說く大洋からの横壓によつて東亞太平洋沿岸に於ける山脈島嶼の特殊な排列を說明する事困難である此點寧ろリヒトホーフエンの考が事實に近い陸地の地盤こ下底の流動性岩層この水平相對運動の結果たる各種の力の作用こして太平洋を隆起させ日本海を沈降せしむる事が可能であり又日本陸地々盤の下底を相對的に西から東に流れる岩漿が實在するこ假定すれば地盤の西は厚さを減じ東は增じその結果太平洋岸を隆起せしめ日本海を低下せしめる事こなる此二原因が今回地震の第一原因をなした蓋然性を認め得る、斯かる作用の爲三浦房總の三紀層が隆起し相模灣底の柔い地殼が陷沒したものこ考へられるこ論ぜるもの「埼玉縣東部地方に於ける震害」(早川千尋、地學雜誌)は該地方の被害は横震動によるものが多いこなせるもの「大地震の因こ果」(横山又次郎科學

知識）は大震の原因は東南の海中で斷層に終る地盤の隆起であらう而して被害の多少は地盤の硬軟によつた事大であるとなしたもの「關東大地震の原因並に本年一月十五日强震に就て」（今村明恒、同誌）は相模中部東南東西北西の細長き地帶が起震帶で水路部の發表した相模灣大陷落は湘南一帶三浦半島房州隆起の意味を了解せしむるもので此起震帶は相模川筋の斷層線へ連續し又三浦半島、房州那古の斷層は陷落地帶の輪廓に緣故を有し房總三浦舊斷層線にも關係を有し一月强震起震帶は此等舊斷層線三浦新斷層線の延長或は平行線の如く思はれるとなせるもの「震災による熱海線の被害と復舊」（脇水鐵五郎、同誌）は早川眞鶴間既成區間被害の根本原因は其の地形と地質の惡かつた事に歸すべく震災は工事の缺點箇所と天然地盤の强弱を實驗せるもので此敎に從ひ復舊すれば可と論ぜるもの「その後の大地震調査」（今村明恒、同誌）はマイケルソンの裝置により地殼潮汐の異常、土地の水準變動を觀測するは地震豫知問題の重要なる研究題目である。鎌倉由比ケ濱の砂地は第三紀層の地盤に比較し五倍

の强さを以て震動したと推定される津浪に就ては海底に表れた隆起部から進んで來たものの如く餘震に就ては相模方面が平常の法則に從つて餘震を續發せしめて居る際九月二日勝浦沖に於て別種の大地震を起し房總系が比較的速かに衰退しつゝあるより見れば九月一日大震は十分に熟して起つた者と思はれるが二日の地震は比較的熟せざるに前者に誘發せられた觀がある關東地震の將來に就ては九月二日勝浦沖大地震跡と六月二日鹿島沖大地震跡とを連ねる線に於て大地震の起り得る可能性ありとせしもの「統計から見た將來の地震」（中村左衛門太郎、同誌）は酒匂川相模灣地震前後に於ける關東近畿及東海南海道洋上地震の消長を揭げて一般の判斷に訴へ樣となせるもの、大震火災一周年を期し國民新聞社が組織せる震災豫防調査隊報告として出版せられた「今後の地震」（關東地震帶の研究）と併せ讀むべきものである。尙地震に關連して自然地理上の論文ではないが「東西文化民族の地震に關する神話及び傳說」（小川琢治、奏文）は東亞の傳說と西洋の傳說とは原史時代から古代に至る間に既に多少の脈

絡が存在するが地震現象に關する神話傳說に於ても又同樣の見解に達すこなせるものである。次に火山に關して「シュナイダー氏の火山基本型分類の價値」(本間不二男、地球)はシュナイダーの分類は未だ第二の段階をも了へて居ないものこなせるもの、「滿州の火山に就て」(田中秀作、同誌)は同地方の火山を略述したものであるが支那側の文獻たる寧古塔紀略を以て地學的記載方法の進まない支那人の書いたものこしては稍要領を得て居るこなした點を注意すべく、「富士山の火山學的概觀」(辻村太郎、科學知識)は側火山は數條の幅射線に沿ひ最大傾斜の方向に列び火山體に生ずる裂罅の存在を示し其の密度が富士の北西及南西側に最大で該方向が富士大島を連結する火山脈の方向である事は偶然でない又火山彈は空中に回轉して生じたものでなく千切れて生じたものであらうこせるものである。次に溫泉に關しては地球第二卷第一號こして溫泉號刊行せられ「溫泉に就て」(小川琢治)「溫泉地に對する醫學的考察」藤浪剛一)「アボリナリスこ六甲炭酸水」(石橋五郎)「三朝溫泉地帶に於ける泉源の配置に就て」(松原厚)「熱海溫泉の成分」(藤井毅太郎)「上訪諏溫泉の泉脈に就て」(三澤勝衞)等の諸編に溢ふるに尙人文こも關係ある「溫泉こ神社」(中村直勝)「溫泉こ佛敎」(石川成章)「溫泉雜記」(濱田青陵)「驪山の溫泉に關する文學」(神田喜一郎)等の數編を收め自然現象こしての溫泉こ其利用の方法を知らしめんこしたもの、之こ共に讃むべきは「本邦溫泉の地質學上の研究一斑」(佐藤傳藏、地學雜誌)である。海洋學關係の論文「日本濠洲間の海洋觀測」(小倉仲吉、地學雜誌)は海水溫度鹽分波浪の觀測報告であるが比重に就て長崎香港間及香港附近で比重か非常に小さい場所があつたのは時支那大陸河江の增水期で江水の影響を考へられるこなせる點を注意すべく。尙海洋學に關しては海洋氣象臺歐文報告第一卷第三號に收められたる "On the theory of monsoon-rain in the Far East" By D. Nukiyama, "The Secondary Undulation of the Oceanic Tide in the Bay of Miho" By N. Kawakami. の兩論文が見るべきであり、海洋學こ關連して潮沼學の方面に於ては「北海道の火山湖」(田中館秀三、地學雜誌)が見るべきものである。

河川學の方面に於て「揚子江水中の可溶性物質及浮泥量に就きて」(田中館秀三、地學雜誌)は浮泥の比重は長石の其れに近似し之を顯微鏡下に檢すれば長石を主とし石英石灰石角閃石輝石鐵鑛等の破片であり斷面〇・一粍を超ゆるものは稀、可溶性の者は鹽化ナトリウム鹽化マグネシウム炭酸マグネシウム硫酸マグネシウム等、可溶性物質量は上流下流大差なきも浮泥量は下流に向つて減じ河口に於ては兩者共に其量を增す之は海水河水混合の際物理的攪伴が下底に近き浮泥、下底沈積物質を持上げる結果で揚子江河口に於ける表面浮泥量は百萬分の二二五・二であるとなせる價値ある論文。尙河川に關してはもの「荒川下流の改修工事」(靑山士、科學知識)又見るべき者である。其他自然地理關係の論文では「秋田縣片山風穴」(荒谷武三郎、地學雜誌)の風穴の氣流に上昇期と下降期とありとなせるもの等注意すべく、數理地理に關して「空中寫眞による測量の現勢」(大村齊、地球)は空中寫眞を綴合したる圖面は軍事上偵察圖常時の參考圖となし得るも地上測量に代換すべき價値と精密を欲せば多大の手數と

失費を要し未だ實用の域に達せずとする有用の文字「富士山の圖上研究」(今村已之助、科學知識)の如き又見るべく數理地理と關連し地圖の方面に於ては今日我國印刷術進歩の程度に於てなし得る最善の努力と數年の日子とを以て「小川琢治日本地圖帖」が刊行せられ我國地圖刊行の歷史に一時期を劃したるを特記しなければならぬ。人文地理の方面に於て「日支兩國の國民性と地形」(淺井治平、地理教育)は兩國の國民性が地形の影響を被る所大なりと論ぜる論文であるが此種のものは餘程警戒して讀むべく。此點に於て「人文地理講話」(佐藤弘)は未だ翻譯の域を脫しないものであるが寂寥たる人文地理學界への一刺戟としなければならぬ。歷史地理の方面に於て「淀川の河道の變遷」(伏見義夫、歷史と地理)は淀川の河道は海拔三十米以下の山城盆地、大阪平野に於て扇狀に變遷したとなし、例を大和川筑後川に取れる「河道變遷の話」(同人、科學知識)と共に讀むべく「震災に由つて出現したる相模河橋脚に就いて」(沼田賴輔、歷史地理)は震災によつて茅崎町下町屋より發見された古橋脚は建久九年舊相模河の

橋脚で川の西遷を立證し相模國府並に中島鄉の問題を解決する鍵であるとせるもの「和名抄の鄉及び田」(澤田吾一、同誌)は和名抄の鄉數は遙阪地方を除け奈良朝時代のものに比し大差なかるべく田積には奈良朝若しくは平安朝初期のものあり一般的に論ぜば著しき變化あらざるべしと雖も國別に考ふる時は尙研究の必要ありとなせるもの「戲作者平秩東作と其著東遊記について」(花見朔己、同誌)は東遊記は蝦夷松前の研究には有力なる參考書として擧げらるべきものと論ぜるもの「近世村落の發達及び變遷」(小野武夫、同誌)は德川時代の村落社會史を一瞥し德川時代の村落と今日の村落との相違點を覗はんとせるものであるが之を歷史的聚落地理の方面より見るも誠に興味ある論文で村落を成因により開發新田村隱遁百姓村寺百姓村豪族屋敷村名田百姓村古代成立農村の六種に分類したる點、新村は何れも水を求めて建設せられ居るとなせる點及地理的狀態に從つて沿道村落、圜狀村落階段村落參雜村落散居村落田莊村落に分類する事が出來るとなせる諸點を注意すべく其の他歷史地理に關して見るべきものに「江戸の生ひ立ち」(岡村金太郎、科學知識)あり、「古版大阪地圖解說」(佐古慶三、國史の部參看)又忘る可からざるものである。政治地理の方面に於て「ケラク國の建設と境界」(內田寬一、地理敎育)は該國の建設はフッシン家に取りて重大なる意義あるのみならず英國の世界政策上に一大礎石を置けるもの、境界の決定は今後の興味ある問題であるとなせるもの、產業地理關係のものとしては「北米ガルフコーストの油田を見て」(小林儀一郎、地學雜誌)「本邦の石炭鑛業」「本邦の銅鑛業」「本邦の鐵鑛業」(井上禧之助 同誌)「世界石炭鑛業に就て」(石川成章、地球)「滿蒙の農業」(田中秀作、同誌)「毛皮業と太平洋」(田子勝彌、科學知識)「我國の石油產額と採掘法」(伊木常鐵誠、同誌)等が見るべく交通地理の方面に於ては「支那の道」(富士德治郎、地理敎育)「熱海線と丹那盆地に就て」(廣田孝一、同誌)「千九百二十三年に於ける世界の商船」(西岡潔、地學雜誌)等が見るべく又「日本の港灣」が土木局より發行せられ指定港灣の沿革現況後方地域との關係

輸出入等を明にせるを記さなければならぬ。地方誌に關しては「カリフォルニヤ州の地理概要」(渡邊萬次郎、地理教育)「地文及び人文地理學上より觀たる九州西北部」(小川琢治、地球)等が見るべく探險記旅行記中地理と關係あるものには「北樺太シュミッド半島探檢記」(横山次郎、地球)「樺太アイノに關する人類學的探究紀行」(清野謙次、同誌)「臺灣見聞記」(板澤武雄、歴史地理)「山東省內地學巡見記」(渡邊久吉、地學雜誌)「北樺太紀行」(內田惠太郎、科學知識)「南洋の族」(飯塚啓、同誌)等が見るべきもの、其他「地理教材研究」第四第五輯が刊行せられて地理學界の一方面を賑はし統計時報第七第八號通商公報が刊行せられて產業地理經濟地理方面の研究者を利し朝鮮總督府の「朝鮮」も亦產業地理交通地理地誌方面に貢獻し內務省より「港灣」が發行せられて港灣に關する知識を啓發し京都府南桑田郡誌出で該地方誌を明かにし石川縣發行の「加賀能登社寺舊跡古城址殖產遺跡」及び岩手縣の發行せる「史蹟名勝天然紀念物調査報告」第四冊が地理的研究に好資料を供し「朝鮮部落調査報告」第一冊が共に朝鮮聚落地理研究の好參考資料を供せる事を記して昨年地理學界の概觀を終らう。〔小牧〕

彙報

◉史學研究會

例會　三月十四日午後一時より法學部第三教室に於て開催、左の兩君の講演あり來會者約五十名午後五時閉會す。

支那大運河の地理學的考察　文學士　藤田元春君

先づ運河に關する支那の書籍の汗牛充棟で、行水金鑑に集成した丈けでも七十卷あり、曆代の河渠志も頗る大部であることより大運河として元代に開かれた北京、杭州間の運河の變遷及地理的事情の考察に入り山東運河備覽、揚州水道記、元史明史の河渠志大清會典を始めマルコポーロ、二卷、マカートニー・エリアスなど外人の旅行記、朝鮮の崔溥の漂海錄、吳錫麒の還京日記、南歸記、張潛山の舟行記、李鈞の轉漕記等、實際に通行した人の手記を參考して通惠河の起源と、其の水準の差に對する閘蹟の說明から、白河及御河の航路と、臨清より清口に至る山東運河、卽會通河の水準と落差及其の水源の說明、及黃河と運